法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

子どもと学びの場ーゆかり文化幼稚園と地域をつなぐ、子ども図書館増築計画ー

清水, 真由美 / SHIMIZU, Mayumi

(発行年 / Year)
2009-03-24
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2009-03-24
(学位名 / Degree Name)
修士(工学)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)

P377.5
M35-2
2008-29

子どもと学びの場

～ゆかり文化幼稚園と地域をつなぐ、子ども図書館増築計画～

富永 譲 研究室

07r5324　清水 真由美

主査＿富永 譲　　副査＿佐々木 睦朗　渡邊 真理

もくじ

<1>背景

<2>目的

<3>方法

<4>分析

<5>結論

<6>計画

<7>あとがき

<1>背景

記憶やイメージに残る
風景や形とはどんなものだろうか。

四角いマッスの壁が垂直に建ち上がる都市の風景は、とても無機的で一様であるように感じる。
私たちは、都市のビルとビルの隙間を歩くとき、その場所場所のイメージを明瞭に記憶していない。記憶に残りにくい環境のイメージは、その所有者に情緒の安定をもたらさない。
都市研究者のケヴィン・リンチは「都市のイメージ」の中で次のように述べている。
『特色があってしかもわかりやすい環境は、安定感をもたらすのみならず、人間の体験が達し得る深さと密度を高めもする。現代の視覚的な混乱の中にあっても、生活することが不可能だということはありえないが、もっと生き生きした背景においては、日々の同じ行為が新しい意味を持つこともできるだろう。』
特色ある明瞭なイメージは、日常の体験に新しい奥行きを与える。
どんな環境や形態、風景や形が、それ固有の強いイメージを生むのか。
私の興味は一番そこにある。

<2>目的

私がとても強くイメージに残る建物がある。
それは私自身が幼少期に通っていた、ゆかり文化幼稚園である。
この幼稚園での体験で最も強くイメージに残っている体験、
出来事を挙げる。

・のぼったり下りたり場所場所で景色が変わる空間の体験
・絵を描いたり、踊ったり、と様々な文化的活動の経験
・つくった絵を展示したり、お遊戯会発表があったり、
　親や友達が見に来てくれた経験

以上の個人的経験から、記憶に残ることのキーワードを抽出する。

・フラットだけで構成されない上下の運動
・多様な文化的経験
・自らの経験を通しての色々な人々との関わり合い

以上３つのキーワードから、記憶に残る空間をつくるために、
成しえる目的を以下のように設定する。

・その場所独自の運動感覚を体感できる空間をつくる。

・子どもが成長していくための多様な経験ができる場を生む。

・感覚の出合いの場であると共に、人との出会いの場となるような、
　様々なコミュニケーションの場にする。

<3>方法

目的を達成するための方法として、事例分析をし、

方法論を導き出す。

・その場所独自の運動感覚を体感できる空間をつくる

→土地の要素を読み込む　-a)

・子どもが成長していくための多様な経験ができる場を生む

→自分自身が動くことで見つけられる、

子どもの遊びの場、学びの場をつくる。　-b)

・感覚の出合いの場であると共に、人との出会いの場となるような、

様々なコミュニケーションの場にする。

→子どもの施設をそれ自体だけのものでなく、

近隣地域社会の幼児の文化施設として利用出来るようにする。　-c)

<4>分析

以下の観点から、事例研究をし、設計の要素として抽出する。

a)土地の要素を読み込む

1.土地の形状を生かす

2.求心的構成

b)自分自身が動くことで見つけれる、子どもの遊びの場、学びの場をつくる。

1.多様性ある遊びの空間

2.単位や場をつくる

3.触覚という個人的体験

4.空間を仕切り、繋げるもの

c)子どもの施設をそれ自体だけのものでなく、
近隣地域社会の幼児の文化施設として利用出来るようにする。

1.こどものための文化施設

-分析からのまとめ

<4>分析

-取り挙げる事例-

・ゆかり文化幼稚園　　丹下健三+都市建築設計事務所　1967

・多摩美術大学附属図書館　伊東豊雄建築設計事務所　2007

・氷見市海浜植物園　　長谷川逸子建築計画工房　1995

・富山県こどもみらい館　　仙田満+環境デザイン研究所　1992

・宇土市立網津小学校　アトリエ・アンド・アイ+坂本一成研究室　2008

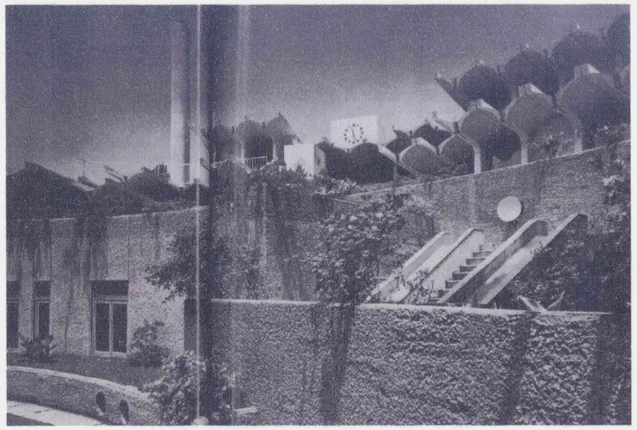
・海外の小学校

・ふじようちえん　手塚建築企画研究所　2007

・国際子ども図書館　安藤忠雄建築事務所　2002

ゆかり文化幼稚園

事例研究では、著者自身の経験も含めて、ゆかり文化幼稚園を主として分析し、読み解いていく。



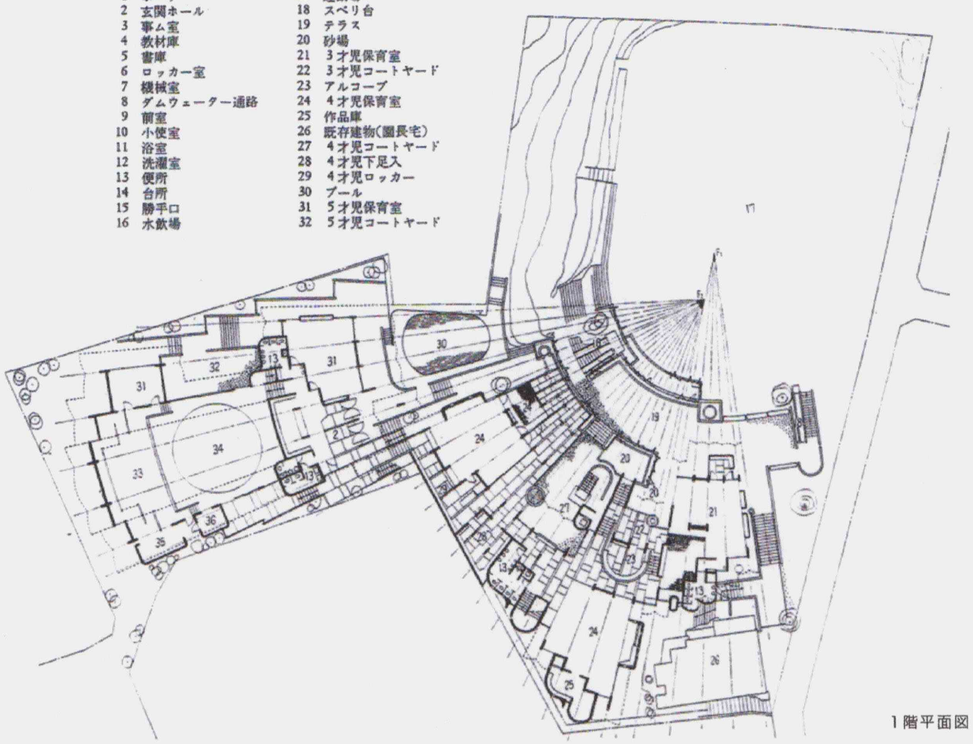
ゆかり文化幼稚園の敷地は閑静な住宅街にあり、付近一帯が緑に包まれた、都会の幼稚園としてはかなり恵まれた環境にある。

敷地面積は約3400平米、地形は不整形であるが、おおむね運動場を中心として扇形をした南傾斜地である。ここに自然を出来るだけ残し、建物自体を自然の一部として空間的に連結させている。

斜面の随所にさまざまな<溜まり>を現出させ、それは子どもたちの自由な<遊び>を誘発するしかけとなっている。

将来的には、当幼稚園だけのものではなく、近隣地域社会の幼児の文化センターとして利用されることは、今は亡き園長先生のかねてからの構想である。

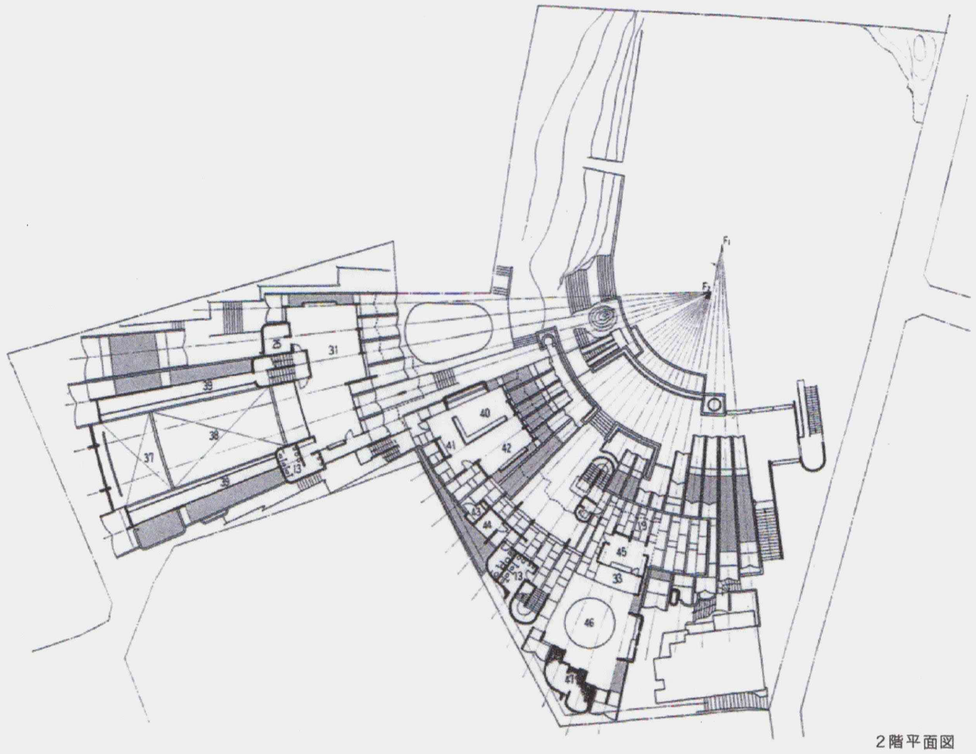
1 ポーチ
2 玄関ホール
3 事ム室
4 教材庫
5 書庫
6 ロッカー室
7 機械室
8 ダムウェーター通路
9 前室
10 小使室
11 浴室
12 洗濯室
13 便所
14 台所
15 勝手口
16 水飲場
17 運動場
18 スベリ台
19 テラス
20 砂場
21 3才児保育室
22 3才児コートヤード
23 アルコーブ
24 4才児保育室
25 作品庫
26 既存建物(園長宅)
27 4才児コートヤード
28 4才児下足入
29 4才児ロッカー
30 プール
31 5才児保育室
32 5才児コートヤード



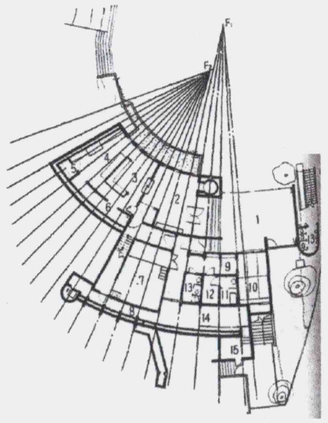
1階平面図

テラスから幼稚園を見る

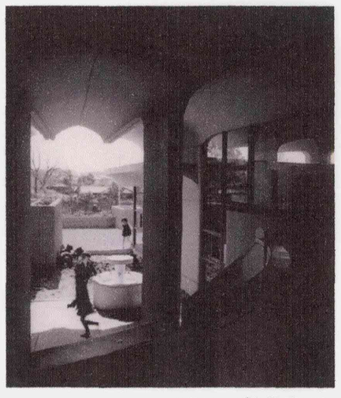
園庭から幼稚園を見上げる



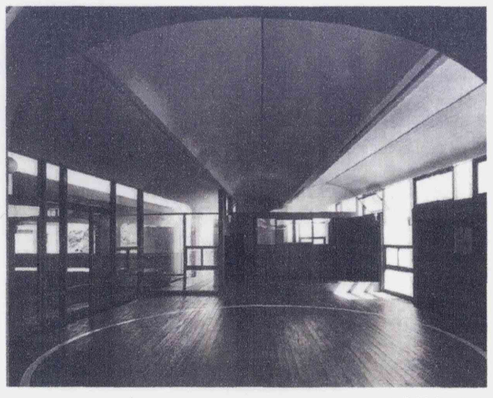
2階平面図



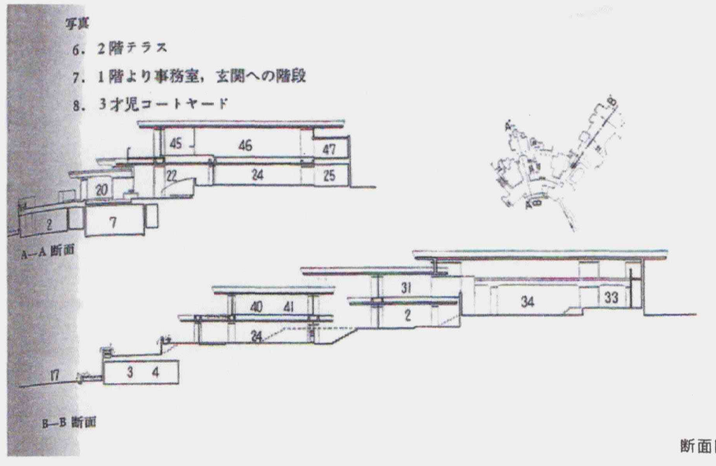
地下平面図



アルコーブを見下ろす



4才児保育室



断面図

a)土地の要素を読み込む

1.土地の形状を生かす

-立体的で有機的な連続性- ゆかり文化幼稚園

-劇場の傾斜舞台- 多摩美術大学附属図書館

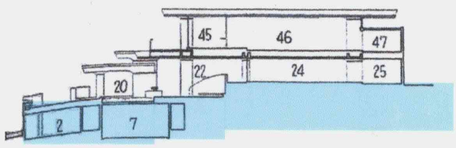
2.求心的構成

-全体の指標となる軸- ゆかり文化幼稚園

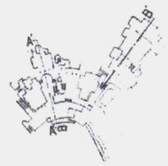
-連続するひとつの輪- 氷見市海浜植物園

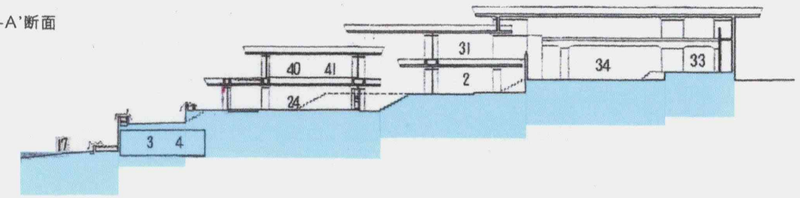
-立体的で有機的な連続性-

ゆかり文化幼稚園



A-A'断面

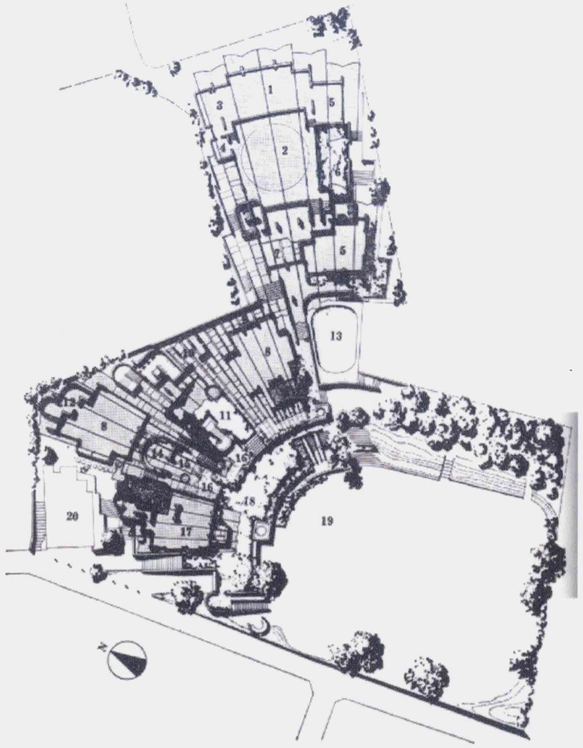




B-B'断面

ゆかり文化幼稚園の敷地は、周囲全体一体が樹木に覆われ、地形はきわめて不整形であり、運動場を取り囲むようにして南傾斜になった段地であり、恵まれた自然を有している。

幼児の機能に対応した空間を並列的に、単なる廊下で連結していくという従来の考え方では、空間が固定的、画一的なものとならざるを得ない。そこでこの各々の個性を持った保育空間を連結するシステムとして保育室を廊下ではなく、この敷地がもっている自然空間と有機的に関連づけつつ連結していくという方法をとっている。



一階アクソメ図

上階から園庭を見下ろす

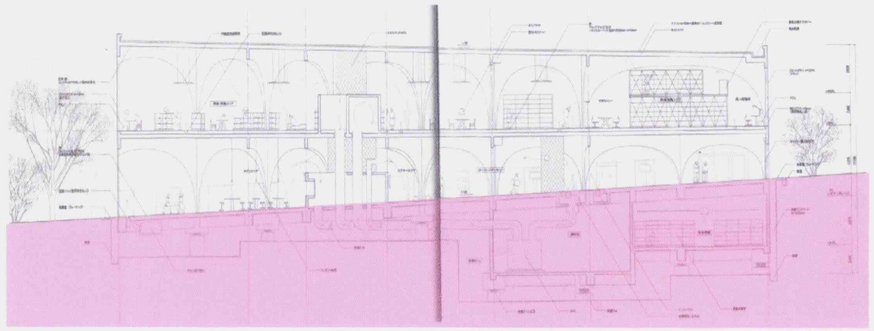
-劇場の傾斜舞台-

多摩美術大学附属図書館

多摩美術大学の新しい図書館の敷地は、丘の麓にある正門のそば、さまざまな木々が植えられた散策路を前庭に、そのまま丘へと繋がる緩やかな傾斜地である。

正門と丘の上の校舎を行き来する際に、図書館を自然に通り抜けられるような流れをつくり出すことがイメージされた。1階に敷地の勾配(1/20)をそのまま取り入れて西側半分をオープンなギャラリースペースにあて、両側にふたつのエントランスを設けている。

傾いた床には、劇場の傾斜舞台に似た効果がある。カフェや前庭の木陰に腰掛けると、1階の人の流れや出来事が、アーチに切られたパノラマのように見渡すことが出来る。

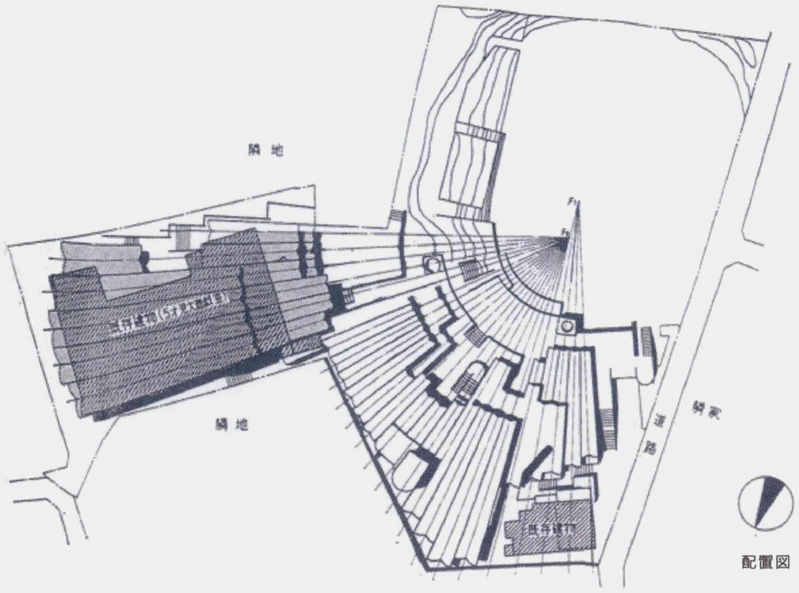


傾斜に沿ったアーケード

1階 平面図

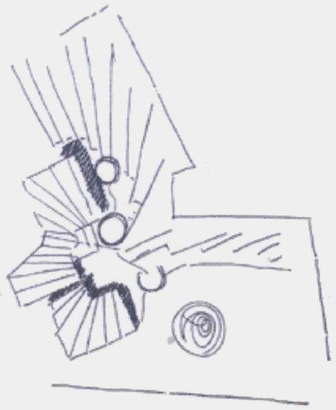
-全体の指標となる軸-

ゆかり文化幼稚園

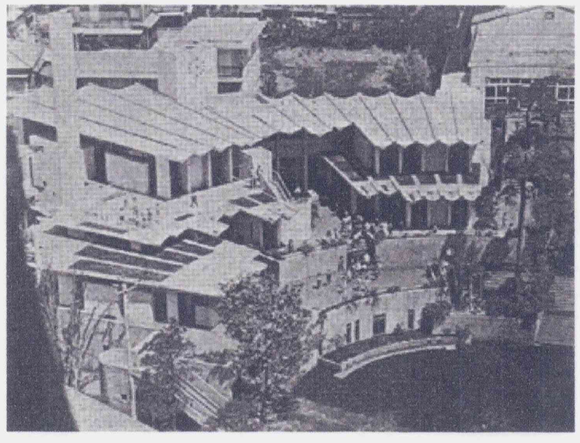


配置図

ゆかり文化幼稚園は、敷地は不整形ではあるが扇形をしている。
敷地に逆らわない多様性のあるプランニングを、運動場に焦点を持つ放射状プランに対応させている。
その強い方向性は、室内外の空間の連続性を高め、運動場に向かって集中していく全体の空間の組み立ての指標になっている。



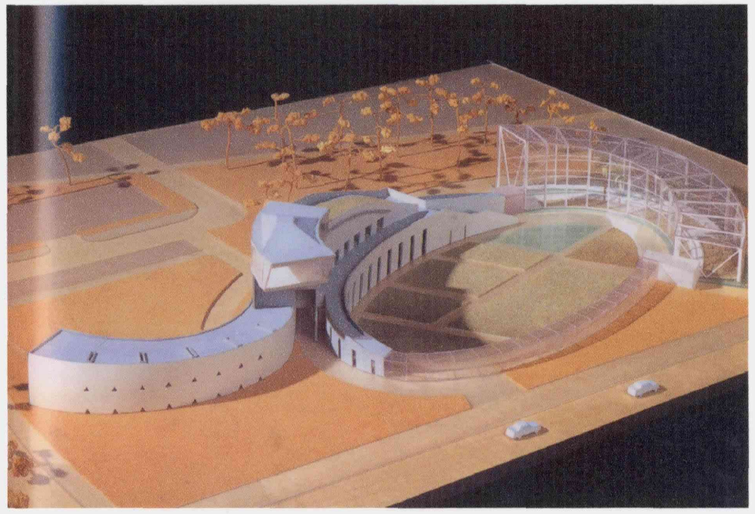
放射状軸のイメージスケッチ



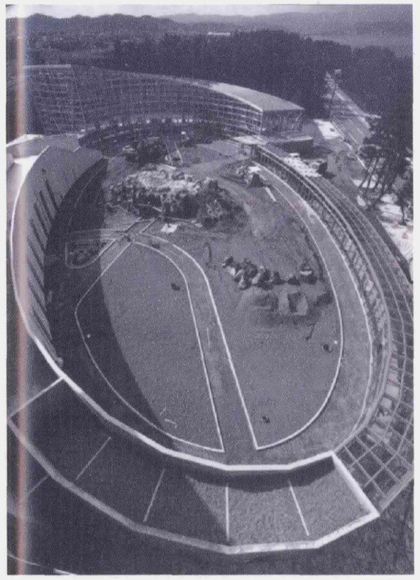
上空から幼稚園を見下ろす

-連続するひとつの輪-

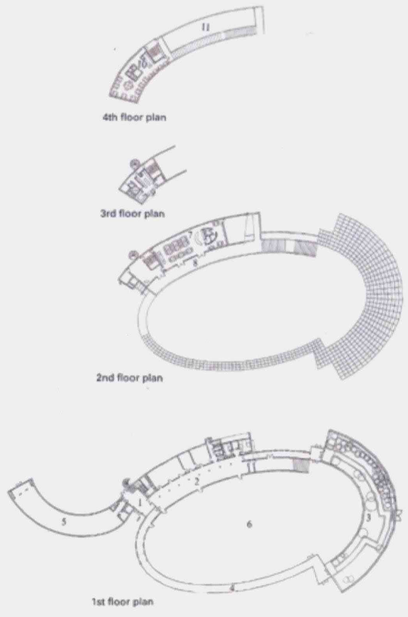
氷見市海浜植物園



連続してひとつの輪となった展示室、温室、ガラスチューブが中庭の展示園を取り巻く構成となった海浜植物園である。この環状の建築形式は人が生きることと植生との「循環」を物語るために選ばれた。
訪問者はいくつかの曲面の空間に自然に導かれるように回遊し、様々な方法で海浜植物に接することができる。



上空から中庭を見下ろす



各階平面図

b)自分自身が動くことで見つけれる、子どもの遊びの場、学びの場をつくる。

1.多様性ある遊びの空間

-感覚の出合いの場- ゆかり文化幼稚園

-遊びの空間=学びの空間- 富山県こどもみらい館

2.単位や場をつくる

-抑揚を与える単位- ゆかり文化幼稚園

-空間的なまとまりをつくる- 宇土市立網津小学校

3.触覚という個人的体験

-感触のシークエンシャル- ゆかり文化幼稚園

-子どもたちの自由な立ち振る舞い- 欧米の学校

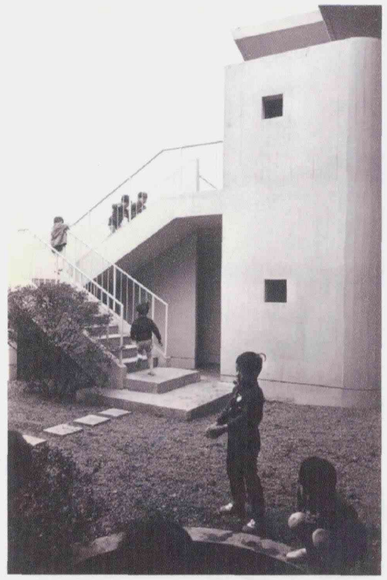
4.空間を仕切り、繋げるもの

-自然を取り込む壁の空間- ゆかり文化幼稚園

-全てを共有するオープンプラン- ふじ幼稚園

-感覚の出合いの場-

ゆかり文化幼稚園



鬼ごっこで階段をかけあがる

ゆかり幼稚園の随所に子どもの遊びを誘発する空間や、きっかけが存在する。

子どもたちは、囲われたところで集まって絵を描き、鬼ごっこで階段をかけあがり、すべり台で園庭とテラスを行ったり来たりする。

子どもたちは、毎日をこの園舎の中で、語り合い、自然や造形に触れ、はね廻ることによって、自分の体で体感し、無限の可能性と、多様性を成長させていく。

テラスから滑り台で降りる

-遊びの空間=学びの空間-

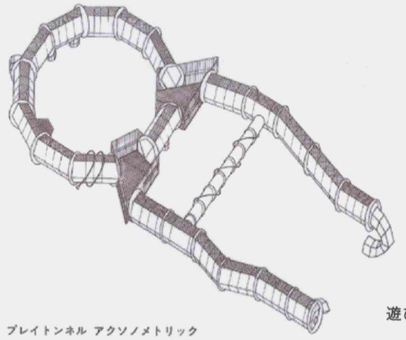
富山県こどもみらい館

「富山県こどもみらい館」の中心的なコンセプトは、「あそびを通しての感覚と興味の拡大」である。

上へ登ってみたり下に潜ってみたり、狭いところ所に入って、小さな所からのぞいてみたりすることで、いままで自分でわかっていると思っていたことを、もう1つの違うまなざしで見ることが出来る。

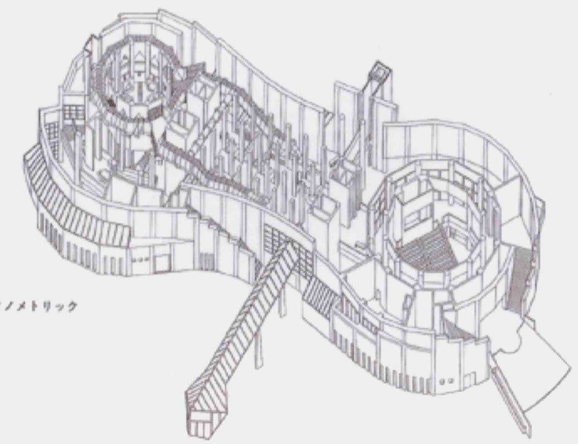
体の位置を変える、這ってみる、動いてみるなど、自分自身が動くことで新しい発見の世界を広げる。

まさに、遊びの空間であると同時に、学ぶ力の空間となっている。



プレイトンネル アクソノメトリック

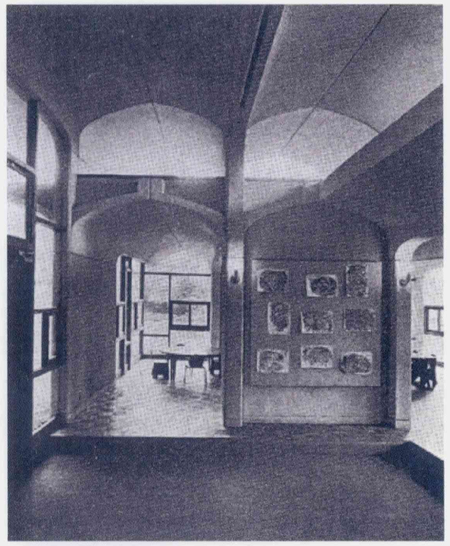
遊びを誘発するプレイトンネル



2階アクソノメトリック

-抑揚を与える単位-

ゆかり文化幼稚園



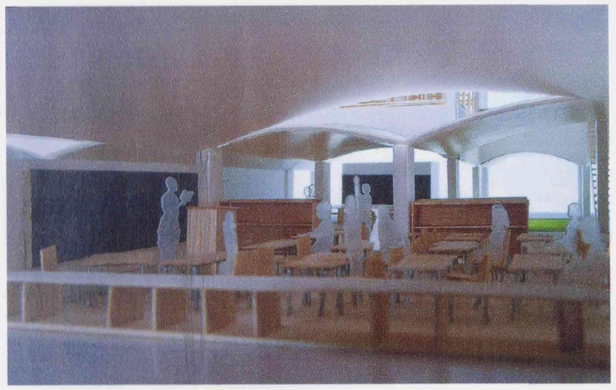
この幼稚園に用いられたPCコンクリートの屋根はパラボラ曲面を持つ版による単位性をもっている。
それらは、各々独立して空間の多様なる固有性を表現している。
建築群にリズムと統一感を与える源となっているとともに、内部では広い保育室の空間を適当な単位に区切っており、幼児の生活にふさわしい抑揚を与える役割を果たしている。

アーチの単位が壁を規定し場所をつくる

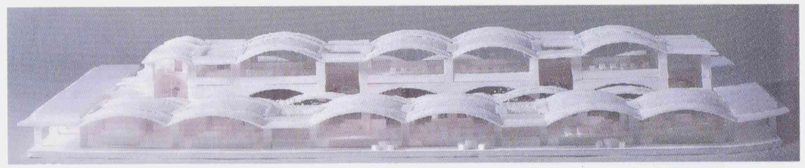
大きい空間もアーチの屋根が存在することによって場所性を生み出す

-空間的なまとまりをつくる-

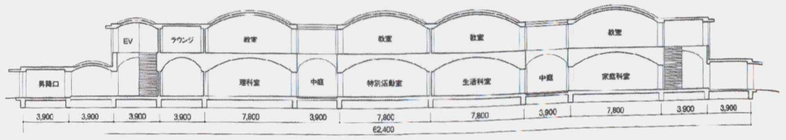
宇土市立網津小学校



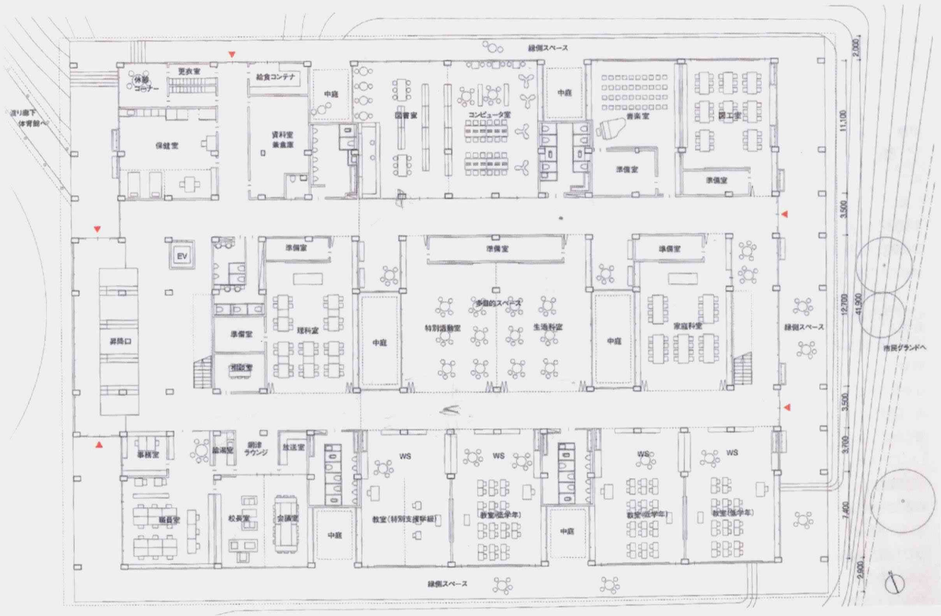
平面的な広がりを覆うように、軒高を抑えた緩やかなボールド状の屋根が連続して架けられる。
これらのボールト屋根は、児童の学校生活のベースとなる教室を単位としており、鉄筋コンクリートラーメンによる均質な架構の中に、ある空間的なまとまりがつくられる。
また、連続するそれらを２種類のライズを持つボールトの組み合わせとすることで妻面側に生じた"ずれ"がワークスペースや特別教室に光をもたらすハイサイドライトとなり、多様な場所をつくり出す。



基本設計段階模型写真



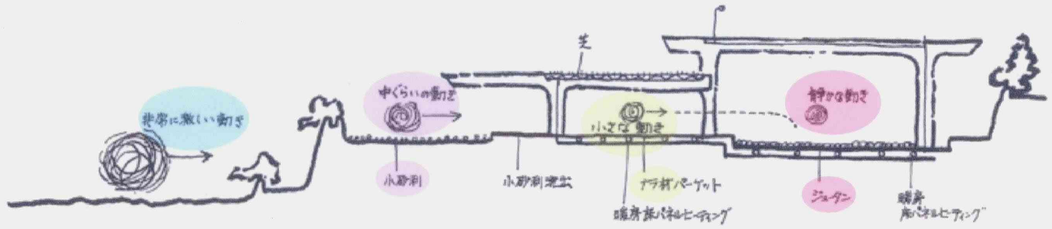
断面図



一階平面図

-感触のシークエンシャル-

ゆかり文化幼稚園



材料-テクスチャを決める手だてとして、人の動きに対応する材料の固軟、テクスチャーのザラザラしているもの、フワフワしているもの、という触感のシークエンシャルな構造づけを意図している。

つまり、動的空間と静的空間-話を聞いたり、絵をかいたりする空間→寝ころんだり、1人になりたい空間、そういった各々の空間にふさわしい、材料とテクスチャーの選定がされている。

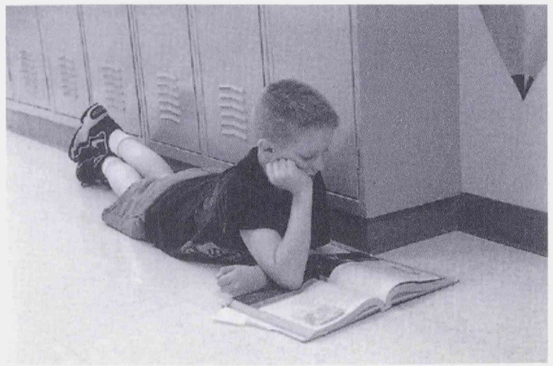
絵を描く空間はフローリング材

レゴのへやは地べたに座れる絨毯

テラスからつながる半屋外の砂場

-子どもたちの自由な立ち振る舞い-

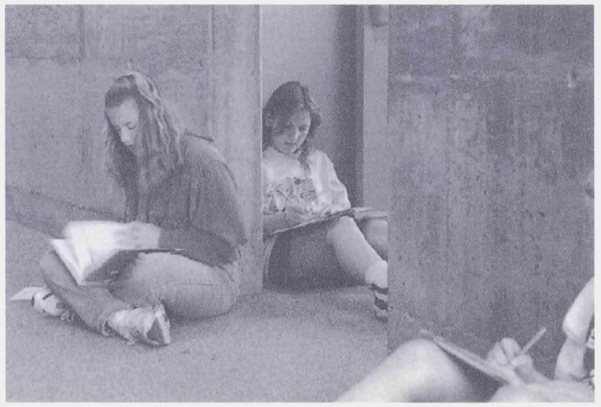
欧米の学校



個人学習が尊重される欧米の学校においては、学習場所の選択も個人の判断に任されている。どんな場所で、どんな姿勢で学ぼうと比較的自由である。

あぐらをかいたり、腹ばいになったり、仰向けになったりと、子どもたちの立ち振る舞いは特殊なものではなく、ごく自然な行動として現れる。

床材は、カーペットであったりビニール系シートであったりと学校によってさまざまだが、時に床の感触を確かめるような子どものしぐさを見ると、何か身体に触れる安定したものがあることの安心感とも映る。

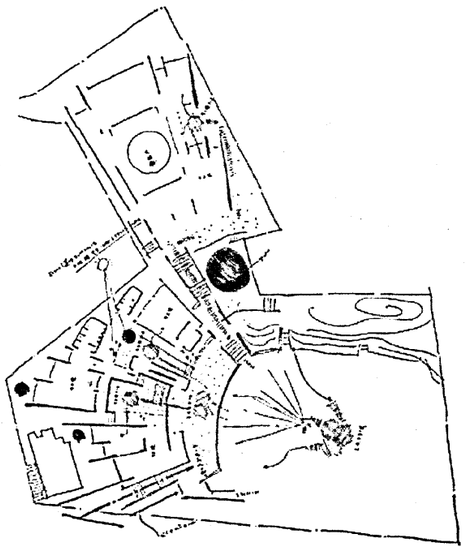


カーペットの柔らかさに促されるように
あちこちに座って調べ学習が始まる

授業の始まる前に先生を取り囲んで色々な話をする

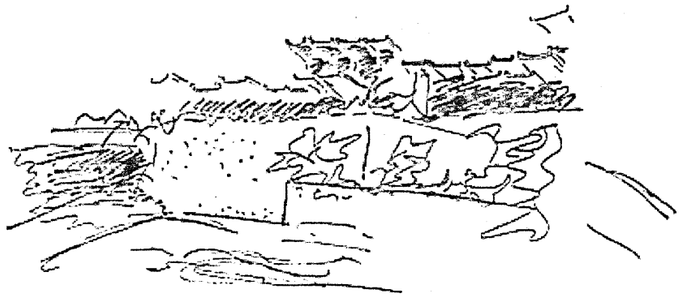
-自然を取り込む壁の空間-

ゆかり文化幼稚園

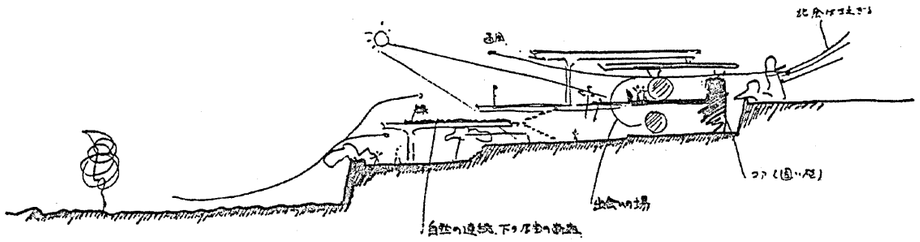


壁による自由な変化のあるプランニングが、運動場に焦点を持つ放射状プランに対応している。独立したマッスの壁の場合、幼児たちにとって威圧感を与える。

周囲をとりまく自然の緑と、段地によって保護されたそれ自身で１つの空間を形成しているゆかりの場合、自然を出来るだけ原形のまま残し、保育室の一部としてそれを取り入れ、敷地全体が保育室となるようつくられた。



周囲を取り巻く環境を幼稚園に取り込む



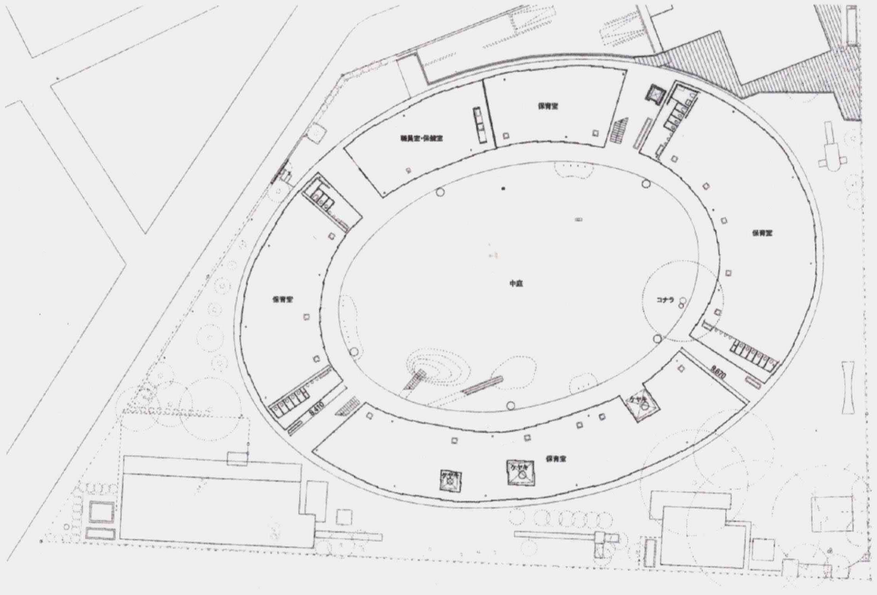
自然を原型のまま残し保育室の一部に取り入れる

-全てを共有するオープンプラン-

ふじ幼稚園

この園舎では隠れるところがない、互いの空間が丸見えの、完全なオープンプランの幼稚園である。
名前クラスの領域を示すのは、積み上げられた「桐ブロック」のみ、壁がないから隣の音も筒抜けである。どこかの教室で問題が起こればすぐとなりの部屋から助けが来る。
密室でなければ園児は自動的に社会的行動を取る。ちょっと隣の教室に行ってみても、何の問題もない、園長先生の話によれば、雑音の多い空間の方が集中力のある園児に育つそうである。

桐ブロックによって仕切られた保育室



一階平面図

c)子どもの施設をそれ自体だけのものでなく、
近隣地域社会の幼児の文化施設として利用出来るようにする。

1.こどものための文化施設

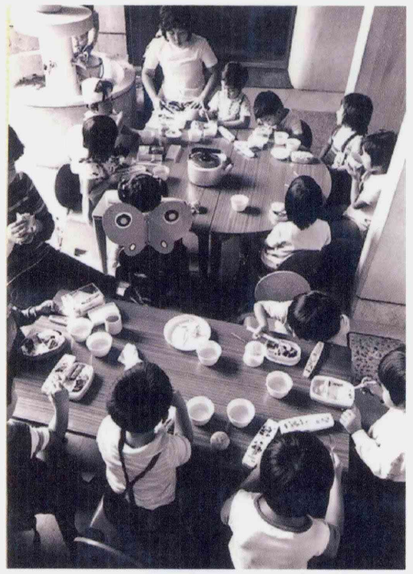
-芸術的環境の必要性- ゆかり文化幼稚園

-本がつなぐ人と人- 国際子ども図書館

-芸術的環境の必要性-

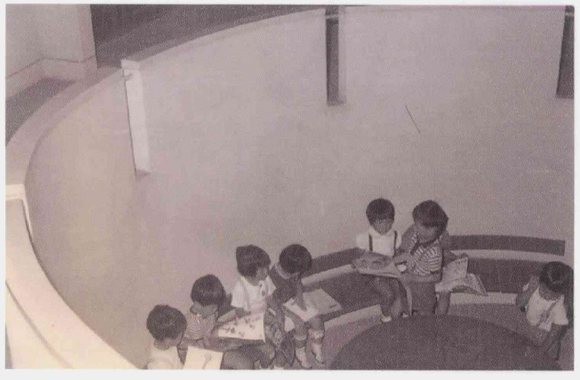
ゆかり文化幼稚園

子どもの成長にとって環境はとても重要である。
ゆかりでは歌や造形など音楽や美術を楽しみ、表現活動によって
子どもの可能性を伸ばしていく教育を追求している。
園舎の中には絵を描くために必要な設備をもった部屋や、みんなで
歌ったり踊ったり出来る大小のホールがある。
保育室は特定のクラスに限定されず、その日のプログラムにあわせて
色々な部屋で遊んだり、お弁当を食べたりする。
保育室と保育室の間は回廊のように開かれた空間でつながれ、
そこかしこの小さなスペースもまた、子どもたちの「ひみつの遊び場」
となっている。



半屋外テラスに出てお弁当を食べる

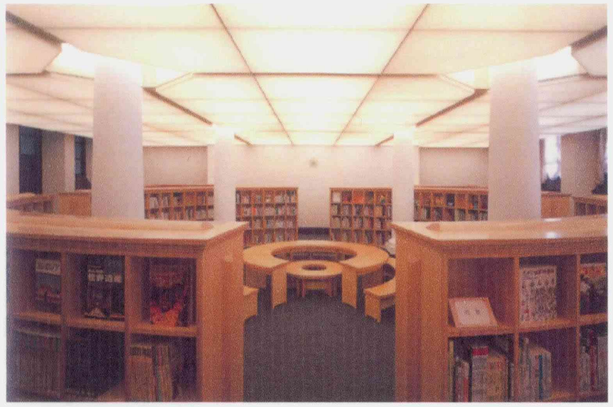
1人になれる小さなスペース



時にはアルコーブで皆で本を読む

-本がつなぐ人と人-

国際子ども図書館

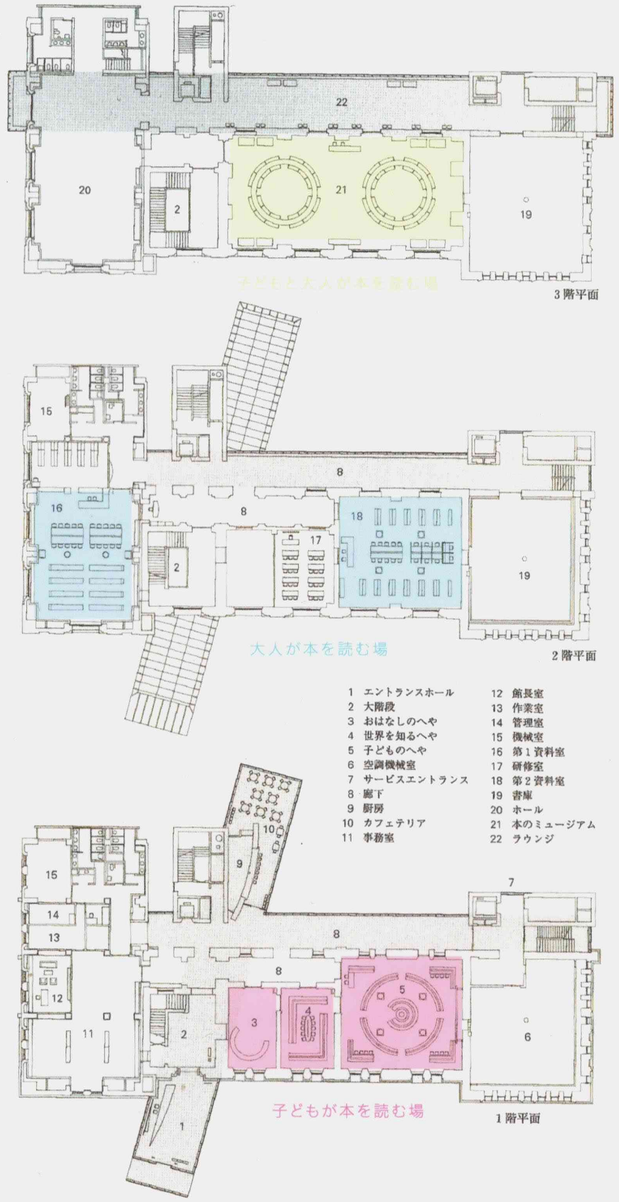


国際子ども図書館は、「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く」という理念に基づいた、子どもから大人までを対象とした児童図書を備えた図書館である。

子どもたちに読書の楽しさを伝え、図書館や本の世界に親しむきっかけを与えることを目的としている。

１階は子どものためのフロア、２階は大人のためのフロア、３階は大人と子どものためのフロアと、子どもが本を読んで学ぶ場であると同時に、大人も子どもと同じ目線で児童図書から読書の楽しさを学ぶことが出来る。

児童図書を通して、子どもだけでなく、大人と子ども、様々な人と人がつながれる場となる。



-分析からのまとめ

a)土地の要素を読み込む

1.土地の形状を生かす

その場所固有の土地の形状を生かし空間を構成していくことで、単なる廊下で連結していくという考え方ではなく、立体的で有機的な連続性が生まれる。
また、その場所場所によって、人の流れや、出来事を違った角度から見渡すことが出来るだろう。

2.求心的構成

中心が空き地となる求心的なプランニングは、全体の空間を組み立てる指標となる。弧を描く道が、全体を繋ぐ動線となり、空間の連続性を高める。
中心に焦点を持つ空き地の空間が、その場を訪れる人たちにとって、その場を強くイメージづける共有の風景になるだろう。

-分析からのまとめ

b)自分自身が動くことで見つけられる、
子どもの遊びの場、学びの場をつくる。

1.多様性ある遊びの空間

絵を描き、物語をきき、踊り、歌う。
上へ登ってみる、下に潜ってみる、狭いところに入ってのぞいてみる。様々なものに触れ、自分自身が動くことで、新しい発見や感覚と出合う。
子どもにとって、遊びの空間=学びの空間であるといえる。

2.単位や場をつくる

ある単位の組み合わせで構成された屋根は、建築群にリズムと統一感を与えると同時に、各々独立して空間の多様なる固有性を表現する。
均質な架構の中に、抑揚のリズムと、ある空間的なまとまりがつくられ、それぞれに多様な場をつくり出す。

3.触覚という個人的体験

人の動きに対応する材料の固軟、ザラザラしているもの、フワフワしているもの、という感触のシークエンシャルな構造づけが、その場にたたずむ時の立ち振る舞いや行動を多様にする。
触覚はあらゆる感覚のうちで、もっとも個人的に体験されるものである。時に床の感触を確かめることで、何か身体に触れる安定したものがあることの安心感を得られるだろう。

4.空間を仕切り、繋げるもの

空間と空間を仕切る壁も、外部の環境を取り込むことで、全体を繋ぎ、連続した多様性を生むことが出来る。
また、互いの空間が丸見えのオープンプランの場合、全てを共有し、繋げる直接的な連続性をつくる。
機能に対応した空間を並列的に、単なる廊下で連結していく考え方では、空間が固定的、画一的なものにならざるを得ない。
その敷地が持つ自然空間や、求められる機能と有機的に関連づけることで互いが連結した場が生まれるだろう。

-分析からのまとめ

c)子どもの施設をそれ自体だけのものでなく、
近隣地域社会の幼児の文化施設として利用出来るようにする。

1.こどものための文化施設

一生を通して再び得ることがない時期である幼時期にとって、
子どもが自分の体で体験し、認識し、思考する芸術的環境を設
けることは欠くことが出来ない場である。子ども施設が、それ自
体だけのものではなく、近隣の地域社会に開けることによって、
感覚の出合いの場であると共に、人との出会いの場となる。
そのような、様々なコミュニケーションが生まれる環境が、
子どもにとって価値ある学びの場になる。

<5>結論

記憶やイメージに残る空間とは？

・土地の形状を生かした有機的構成

・軸のある連続的空間

・自分自身が動くことで新しい発見がある場

・均一的なまとまりの中にリズムがある形態

・視覚的だけに終わらない触覚を使った空間体験

・外部の環境を取り込んでいる空間

・様々なコミュニケーションが生まれる場

その土地の環境を生かし、
それに伴った運動感覚的体験ができる空間。
また、それによって新しい発見や
様々なコミュニケーションが生まれる場。

<7>計画

(a)計画背景

(b)計画地の現状

1.ゆかり文化幼稚園と周辺環境

2.敷地

(c)設計概要

(d)建築計画

1.鳥瞰図

2.平面図

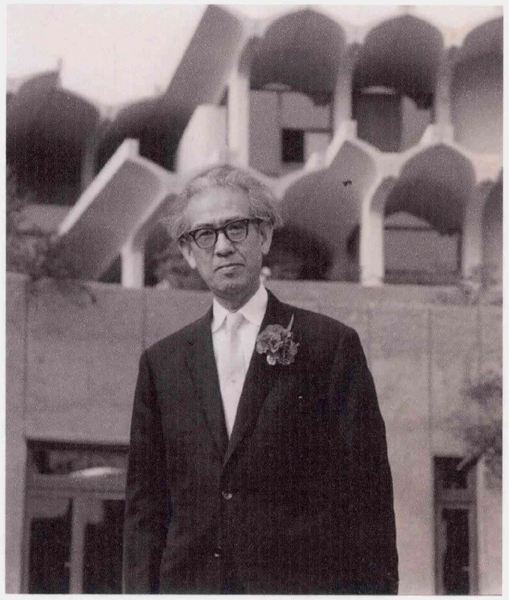
3.断面図

4.立面図

(e)スタディ模型と初期スケッチ

(a)計画背景

ゆかり文化幼稚園の園長先生は、幼稚園を幼稚園だけのものではなく近隣地域社会の幼児文化センターとして利用されることを構想していた。
今は亡き園長先生のかねてからの願いを引き継ぎ、地域と図書館をつなぐこども図書館を計画する。



(b)計画地の現状

1.ゆかり文化幼稚園と周辺環境

ゆかり文化幼稚園は、世田谷区の閑静な住宅地にある。

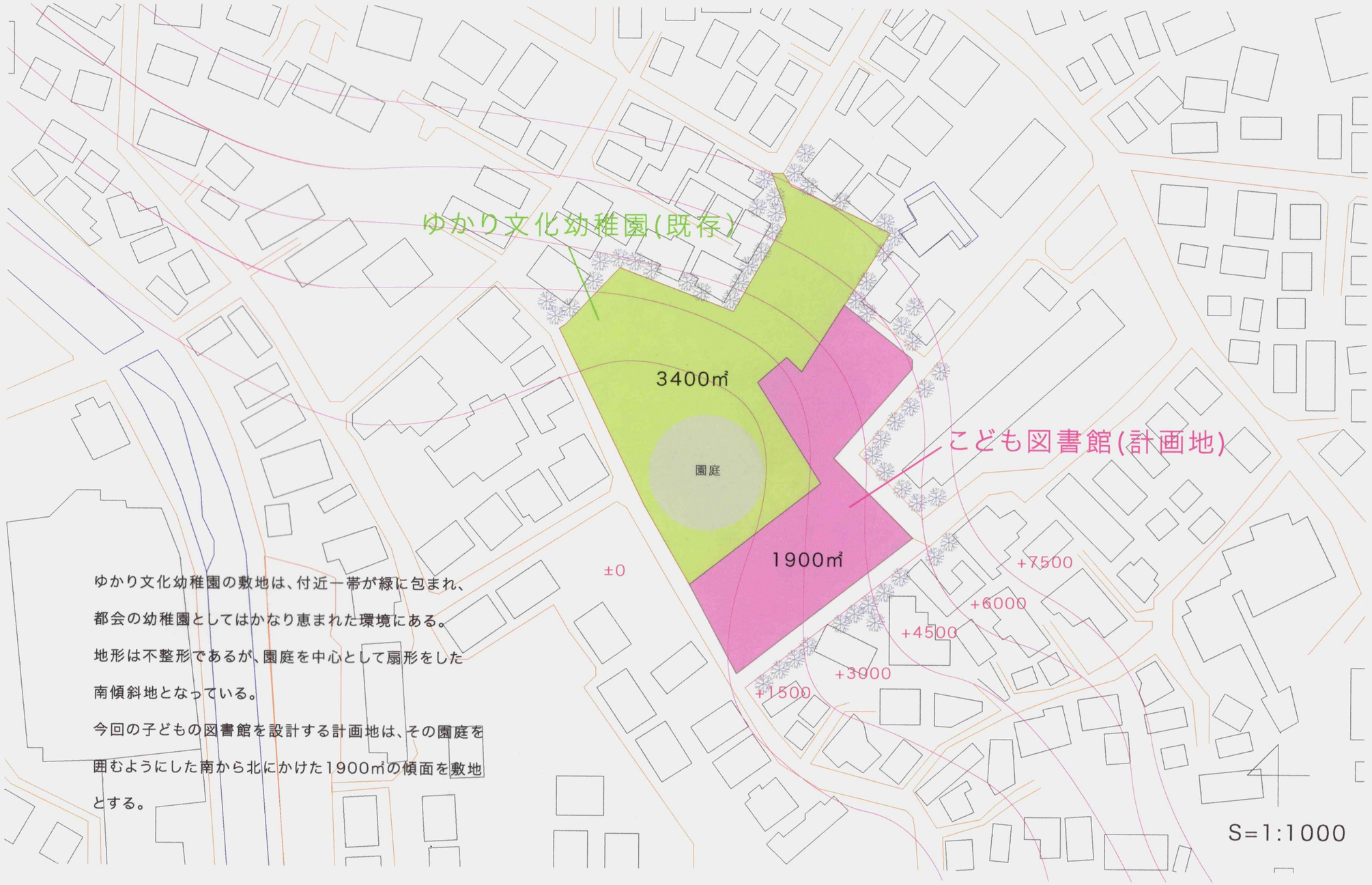
付近一体は緑に包まれ、仙川を谷にして、東と西に向かって傾斜地となっている。

今回、こども図書館を設計する敷地は、

ゆかり文化幼稚園の東側に当たる約1900㎡の傾斜地である。

(b)計画地の現状

2.敷地



ゆかり文化幼稚園の敷地は、付近一帯が緑に包まれ、都会の幼稚園としてはかなり恵まれた環境にある。地形は不整形であるが、園庭を中心として扇形をした南傾斜地となっている。

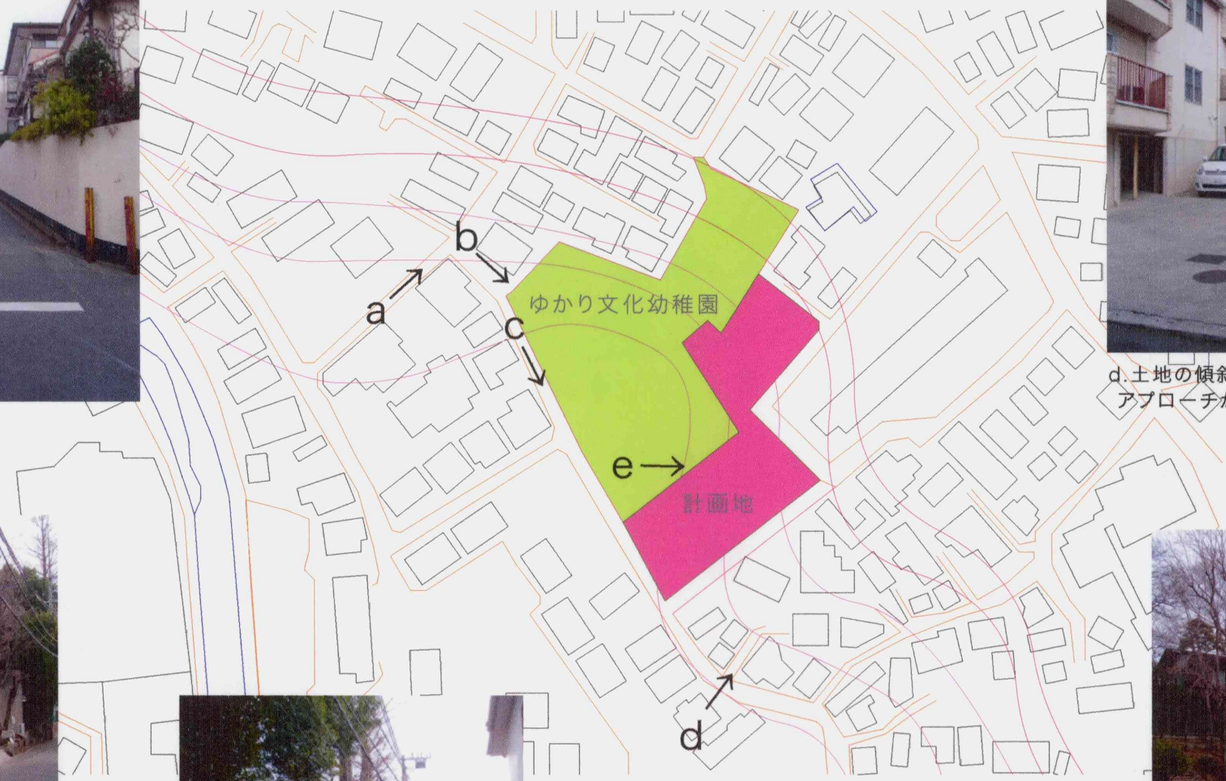
今回の子どもの図書館を設計する計画地は、その園庭を囲むようにした南から北にかけた1900㎡の傾面を敷地とする。

(b)計画地の現状

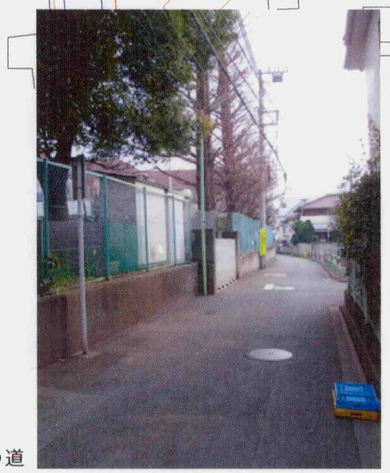
2.敷地

a.急勾配の坂道

d.土地の傾斜によって
アプローチが階段となる住宅



b.ゆかり文化幼稚園アプローチ



c.園庭の目の前の道

e.園庭から敷地方向を見上げる

園庭から北面にかけて傾斜地が駆け上がる。

それにともなって周辺の住宅や道も階段や坂道の場が多く出現し、

この場所固有の風景をつくり出している。

(c)設計コンセプト

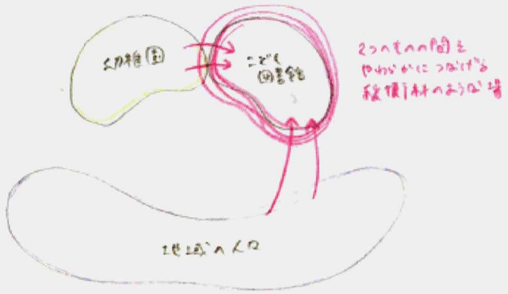
論文の結論から得た要素を生かし、記憶やイメージに残る建築空間をめざす。

ゆかり文化幼稚園の環境を生かし、それに伴った運動感覚的体験が出来る空間。
また、それによって新しい発見や出会い、様々なコミュニケーションが生まれる場をつくる。

(c)設計コンセプト

-近隣の地域と幼稚園をつなぐこども図書館-

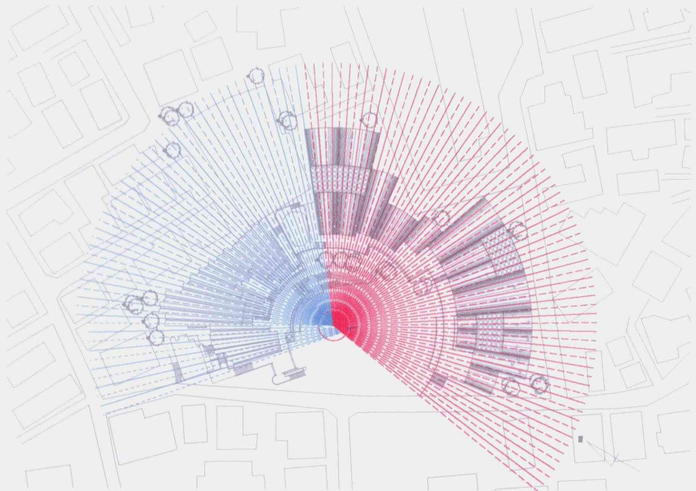
この幼稚園は1967年に竣工され、著者自身の母校でもある。
私が幼稚園に通っていた20年前程の当時は300人程の園児が通っていたが、現在では少子化問題から園児の人数はその半数の150人程に減っている現状である。
ゆかり文化幼稚園が建って40年程たった現在、求められることも時代と共に変わって来ている。



本計画では、ゆかり文化幼稚園をこれ自体だけのものではなく、近隣の地域の人々と幼稚園の子どもをつなぐ場所にする。
大人も子どもも楽しむことが出来る本という媒体と、共有の場を通して、幼稚園がけっして閉じたものではなく、外の世界に向かって広がっていく可能性を持たせる。

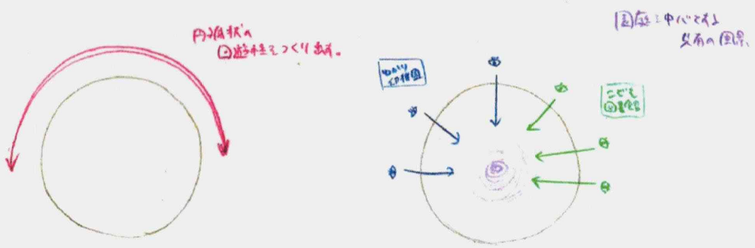
(c)設計コンセプト

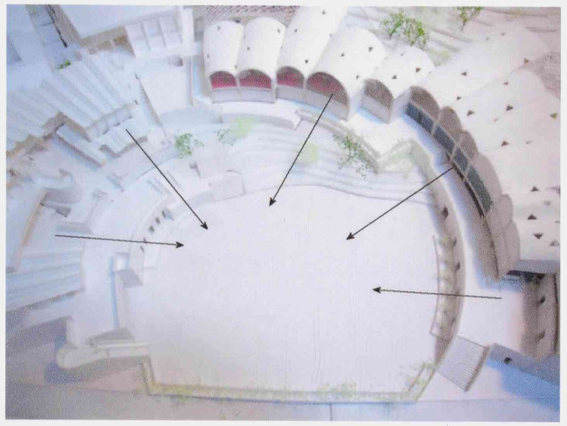
-求心的軸の継承-



ゆかり文化幼稚園の園庭から伸びる求心的軸を継承する。

円弧の道が幼稚園から図書館へとつながり、連続性をつくり出す。



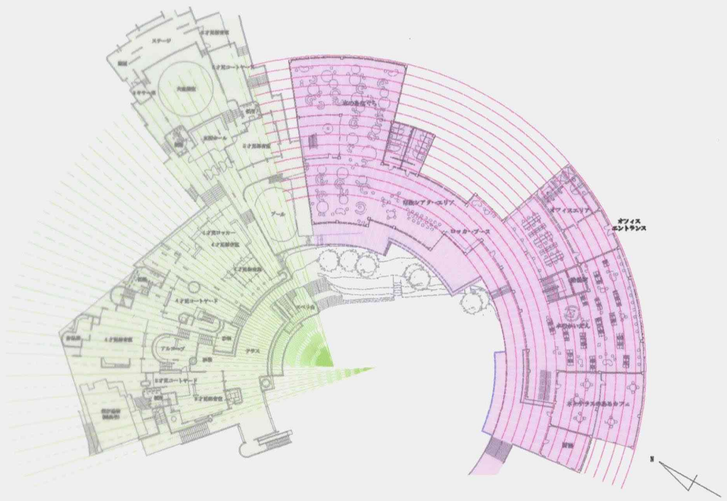


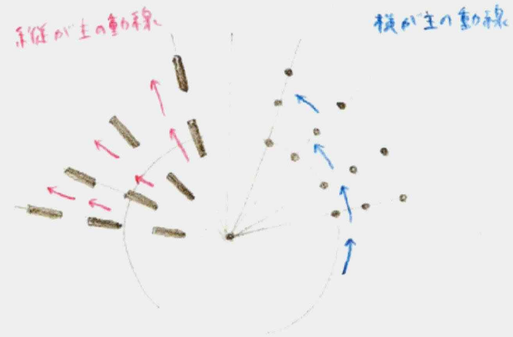
また、円弧によって囲われた園庭が、この場に(幼稚園、子ども図書館共に)足を運ぶ人にとって共有の風景となりえるだろう。

幼稚園のテラスからはどこにいても園庭を見下ろせる。

(c) 設計コンセプト

-扇状のオープンプラン-





ゆかり幼稚園では、放射状の軸に平行した動線で、壁が主で仕切られた空間となっている。

それに対して本計画では、放射状の軸に対して垂直の円弧状の動線で、オープンプランという形をとった。

壁で仕切らない柱のオープンプランは全てを共有する空間であり、どこかの部屋で問題が起こってもすぐとなりの部屋から助けが来る。

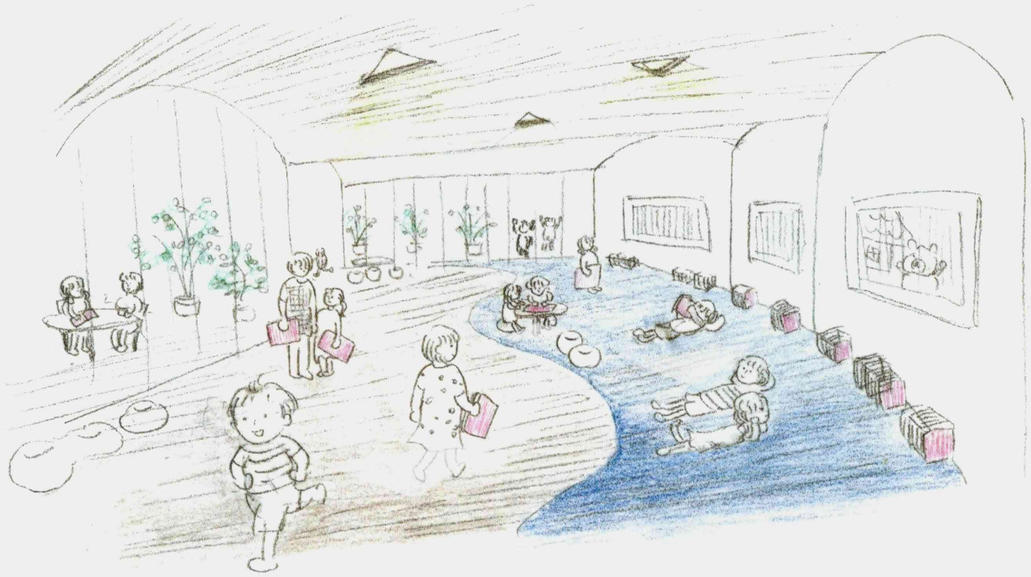
ゆかり幼稚園の壁で構成された空間。

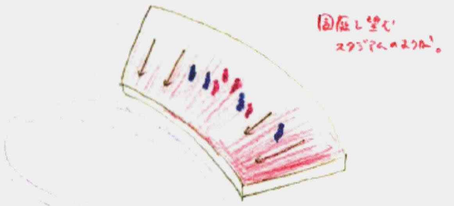
子ども図書館の円弧状の動線。

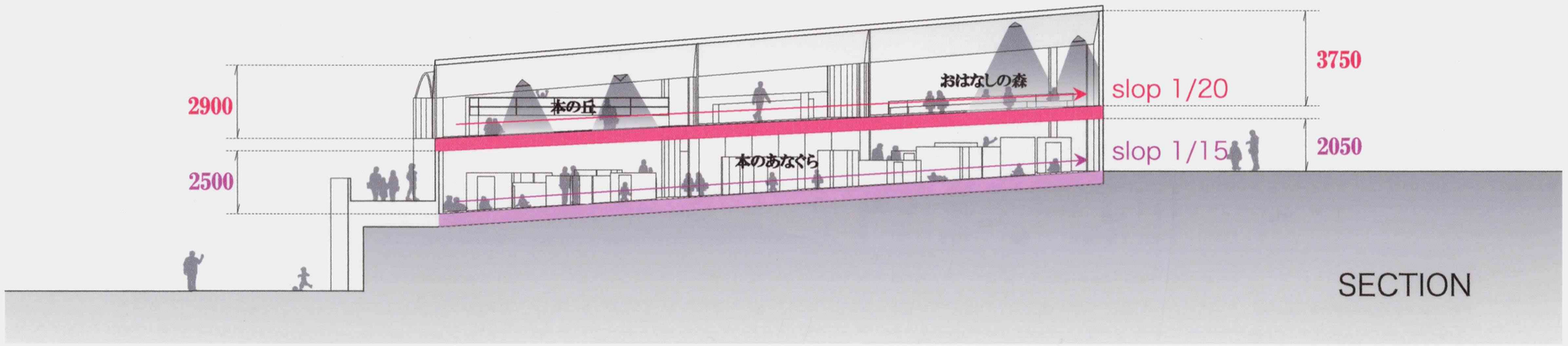
(c)設計コンセプト

-土地の高低差を読み込んだすり鉢状の空間-

ゆかり幼稚園では、土地の高低差を生かして、廊下空間を並列的にではなく、立体的につないでいる。
本計画では、園庭から外に向かって劇場のような傾斜の床を設ける。
すり鉢状の床は、園庭や向かいに建つ幼稚園の求心性を高め、立体的空間体験によってこの場所を記憶するだろう。
園庭を眺めながら、傾斜の丘に腰をおろし寝転がって本を読む、そんな風景を期待する。



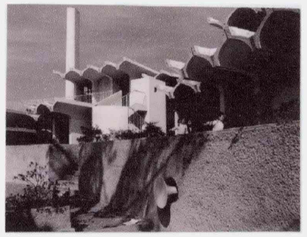




(c)設計コンセプト

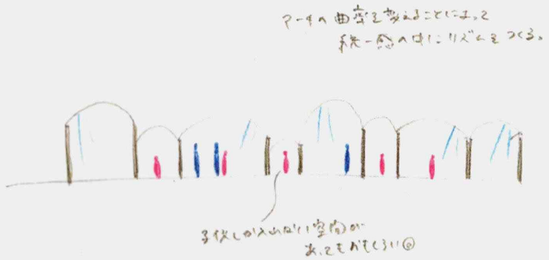
-ボールドアーチと光がつくるリズムとまとまり-

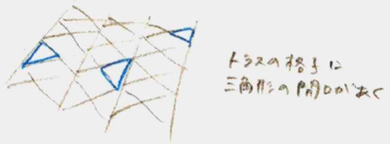
ゆかり文化幼稚園に用いられている屋根は、プレキャストコンクリートのパラボラ曲面を持つ版による単位を持っている。
本計画では、屋根をボールトアーチ型にし、ひとつの単位とまとまりをつくる。鉄骨のトラス造にすることにより大から小まで
幅広いスパンでアーチをつくることができ、太いコンクリートの柱と対比させ、軽やかで明るい場所をつくる。
曲率を変えることによって統一感の中に、変化のあるリズムをつくり出し、躯体から切り取った三角形の開口が、
その場に楽しげな雰囲気を与える。



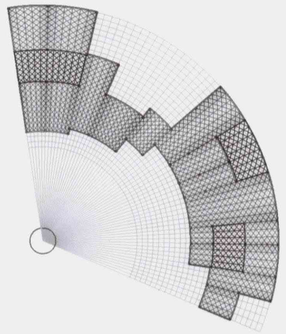
ゆかり幼稚園のパラボラ曲面を持つ
プレキャストコンクリート

リズムをつくるアーチの屋根。
三角形の開口から光が舞い落ちる。





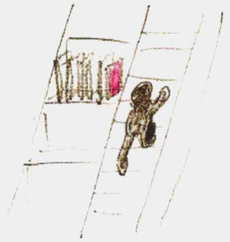
鉄骨ボールトアーチ　構造

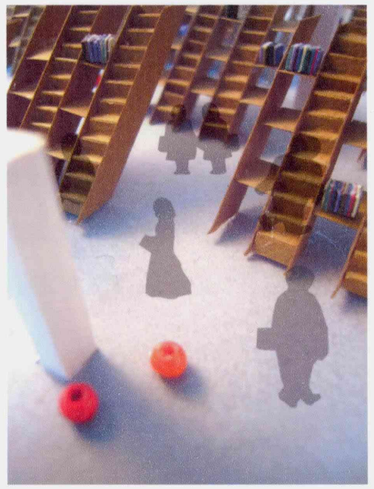


(c)設計コンセプト

-人と空間、本との間に生まれる遊び-

本棚によじのぼったり、もぐりこんだり、本を寝転がって読んだり、皆で集まってお話をきいたりと、自分自身が動き回って本を読む場所や姿勢を見つける。
テレビゲームなどで遊びが自閉化している現代の子どもにとって、自分自身が動き回ることで身体的遊びの経験が、学びの経験に変わっていくだろう。



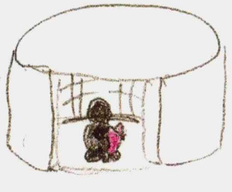


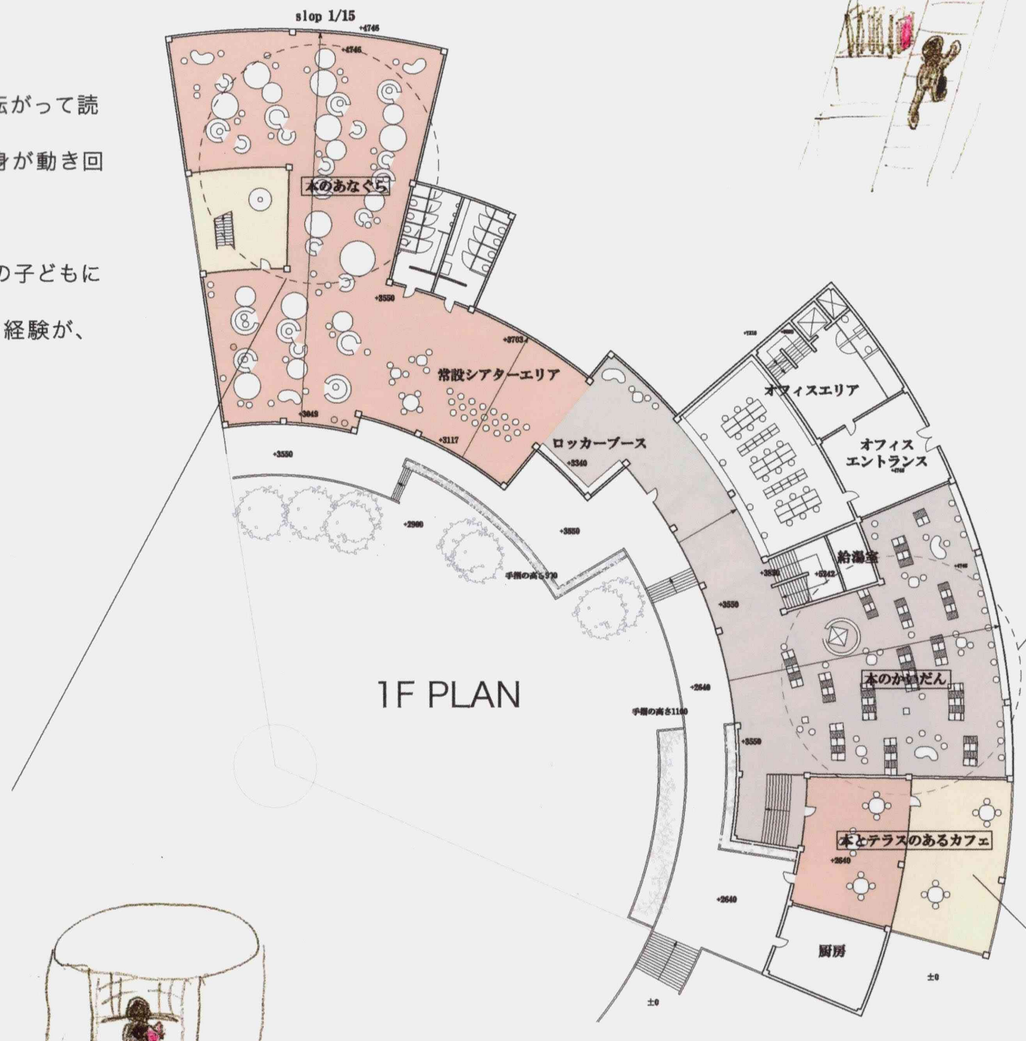
1F「本のかいだん」スペース

子どもも大人も、この本のかいだんをよじのぼり、時に階段の上で本を読むかもしれない。

1F「本のあなぐら」スペース

円盤の本棚は子どもしか入ることの出来ない本を読む場。囲われた場所でひとりで本を読むことも時に子どもには必要だろう。





1F「本とテラスのあるカフェ」

図書館から直接アクセスが出来、借りた本を自由に読むことが出来る。
幼稚園に子どもを迎えに来たお母さんや、地域の人がお茶をする場でもある。

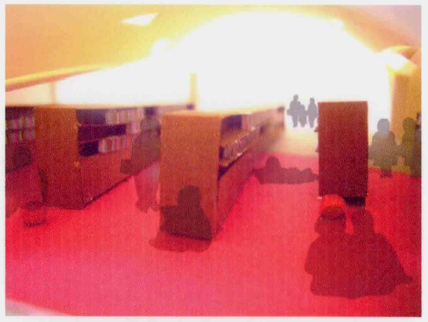
(c)設計コンセプト

-人の動きに対応する床の質感-

寝転がって本を読んだりする場所は絨毯、子どもたちが地べたに座って絵を描いたりする場所は木のフローリング材と、人の動きに対応した床材を選ぶことにより、子どもの行動や立ち振る舞いを自由にする。清潔保持のために子どもたちが床に腰を降ろすのが頻繁ではなくなっている世代、子供の行動パターンをもっと自由にするきっかけをつくる。

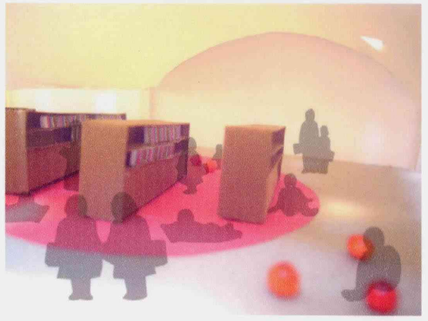
2F「おはなしの森」スペース

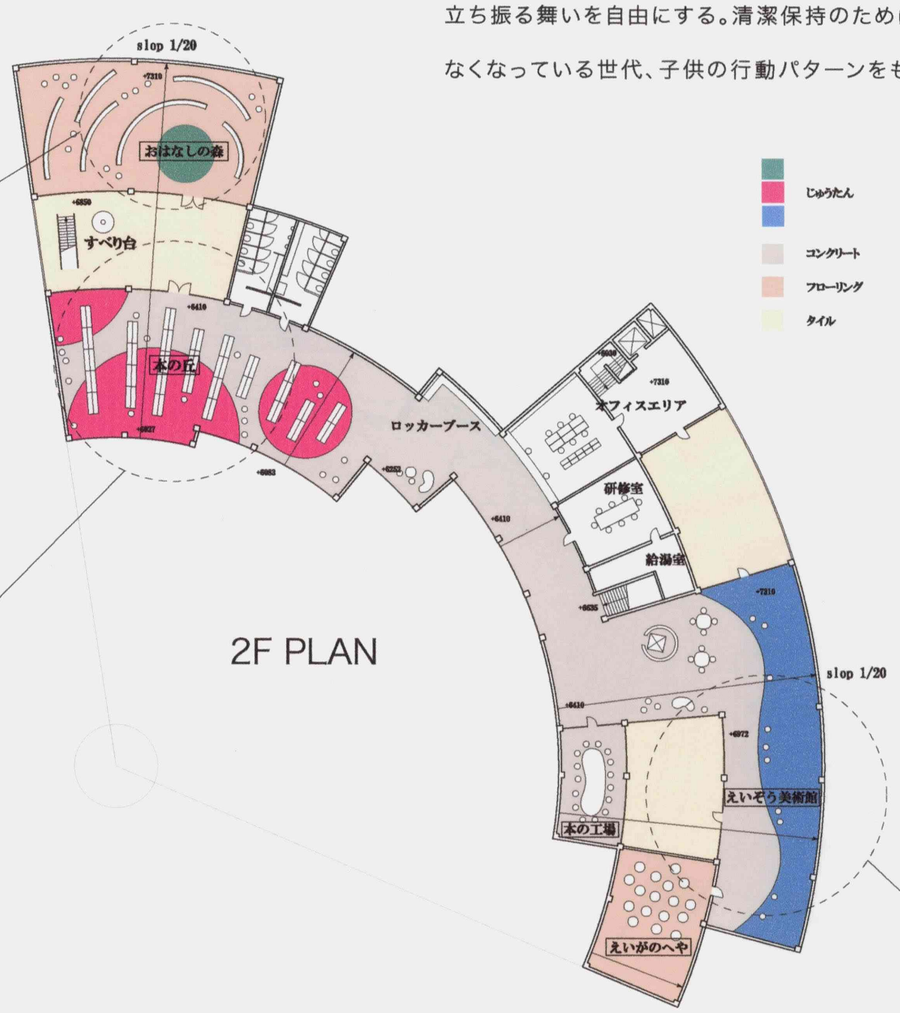
円形のイスが、壇上となる円形のじゅうたんを取り囲む。
中庭から入ってくる光が円形のじゅうたんを明るく照らし出す。



2F「本の丘」スペース

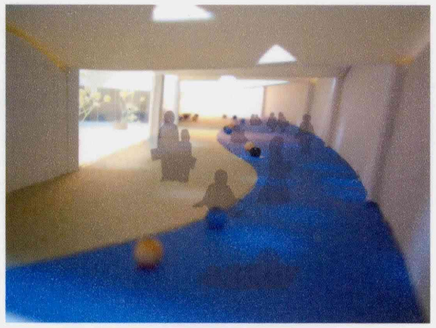
本の丘は傾斜に沿った形で本棚が並ぶ。
床がカーペット素材であることによって、寝転がって本を読むことが出来、子どもの姿勢や立ち振る舞いを自由にする。





寝転がって
本が読める場
= 自由きままがいい素材

テラスで高低はまわる
= ざわざわした感覚

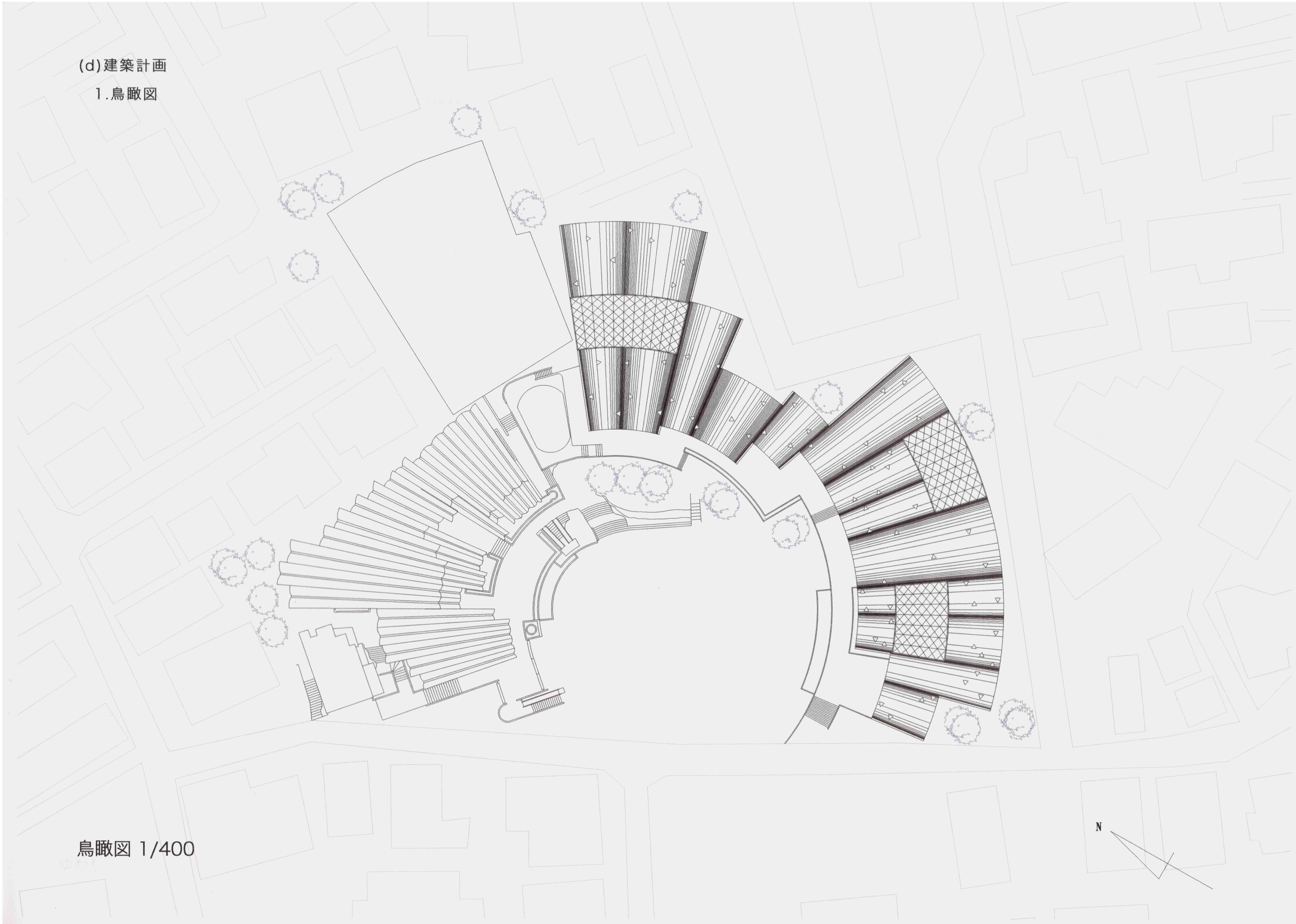


2F「えいぞう美術館」スペース

えいぞう美術館は絵画のように、映像パネルが設置された映像ギャラリー。歩きながら映像を垣間見ることも出来るし、青いじゅうたんの上で寝転がりながら鑑賞することも出来る。

(d)建築計画

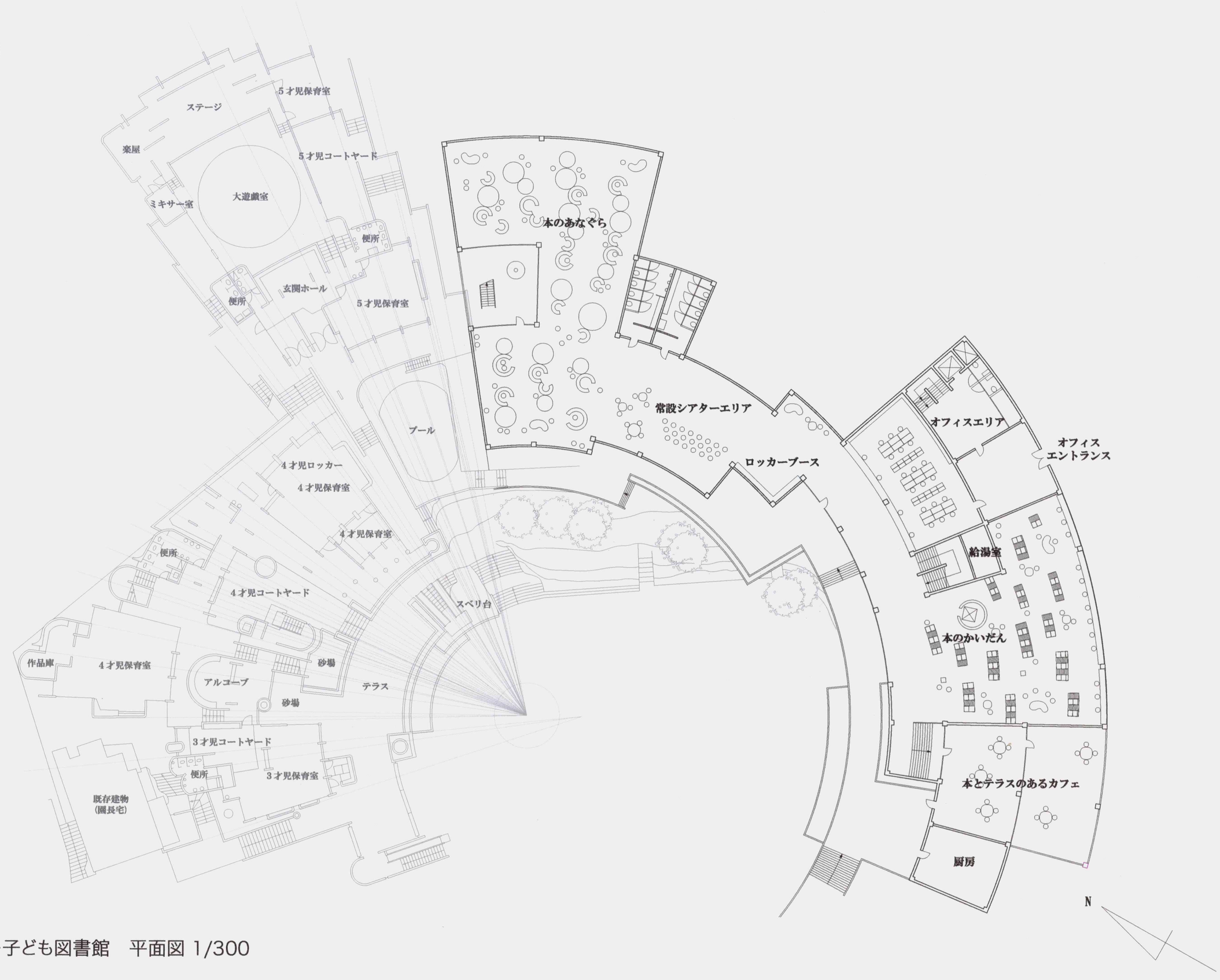
1.鳥瞰図



鳥瞰図 1/400

(d)建築計画

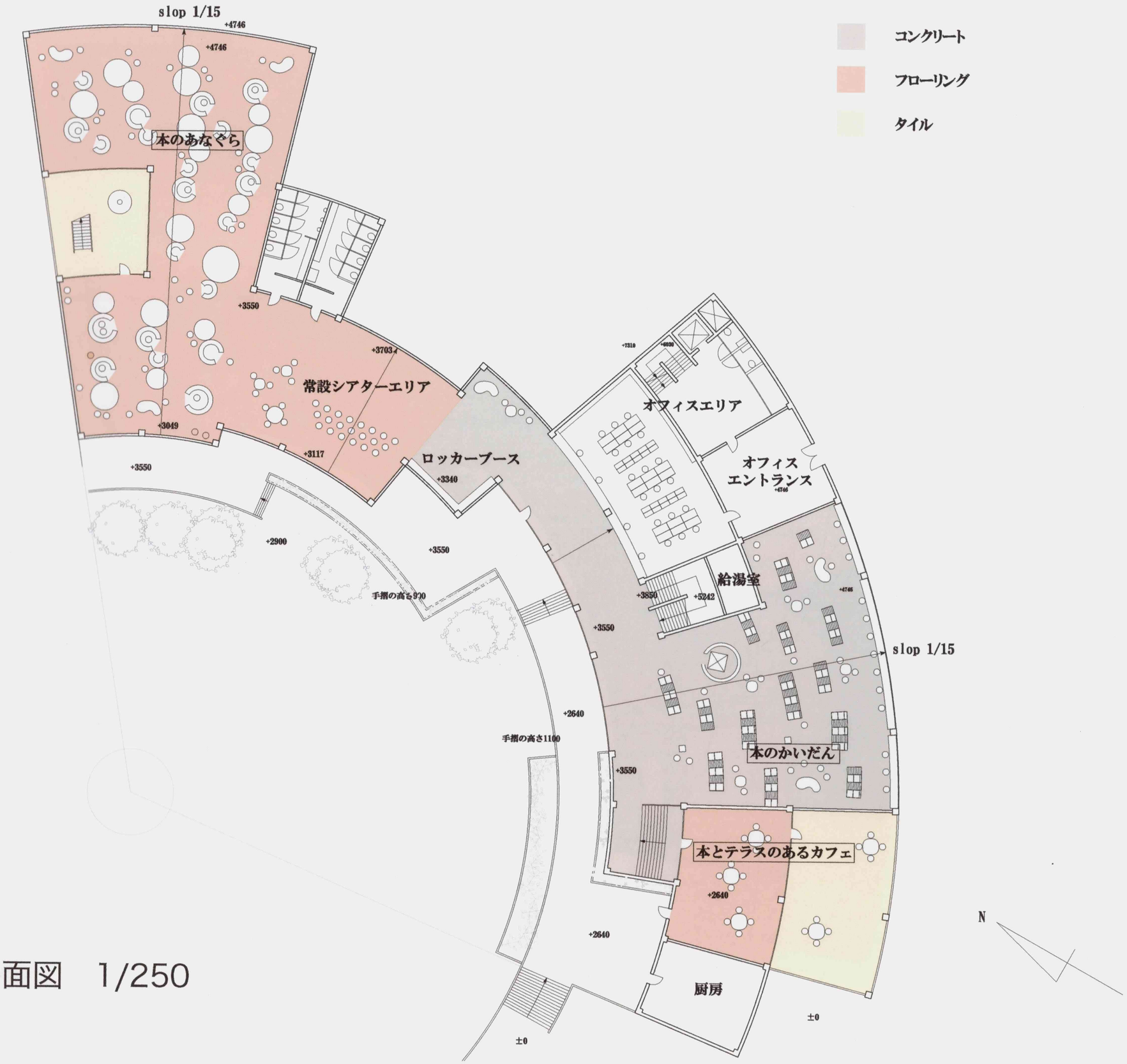
2.平面図



ゆかり幼稚園＋子ども図書館　平面図 1/300

(d)建築計画

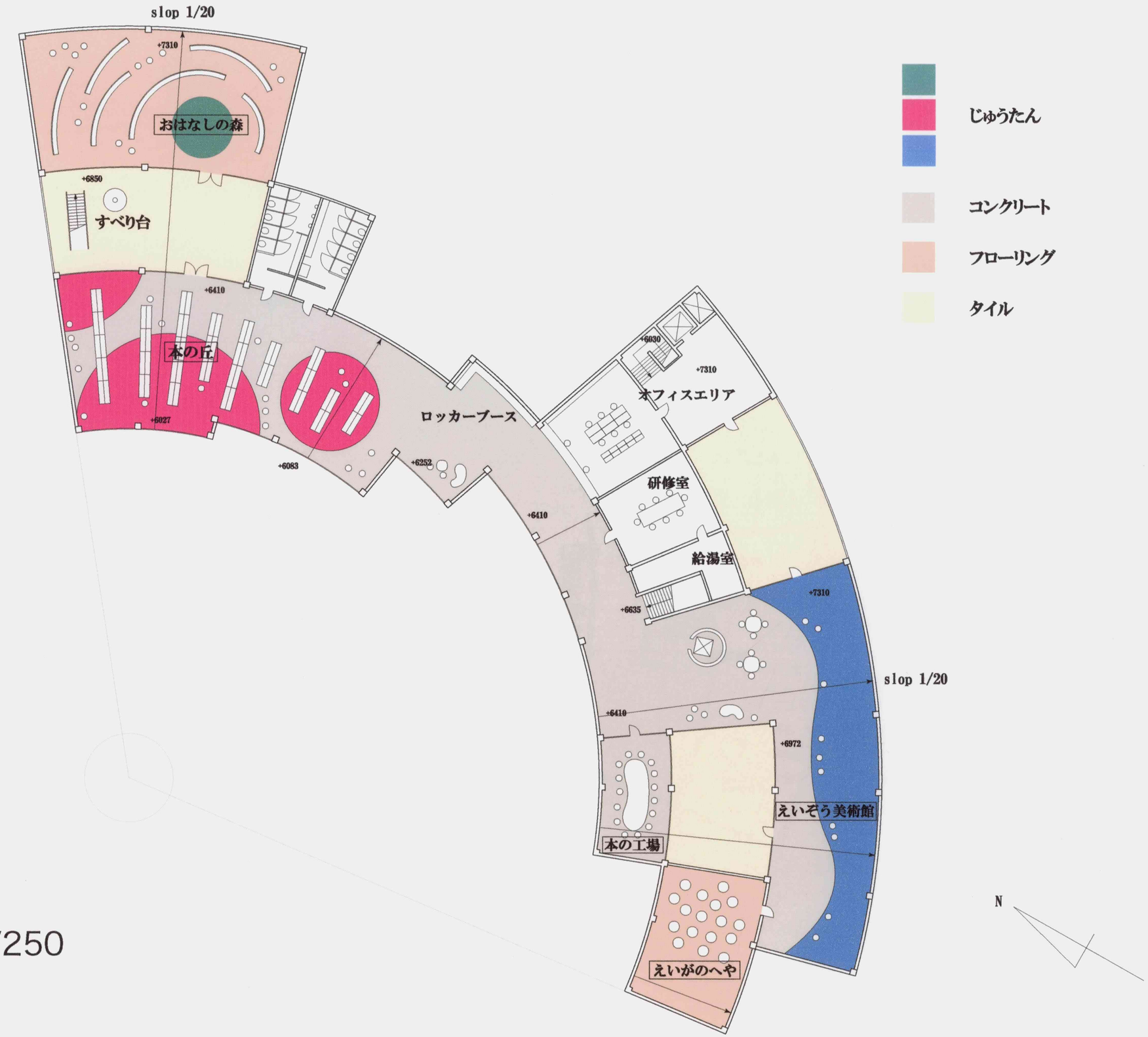
2.平面図



1F　平面図　1/250

(d)建築計画

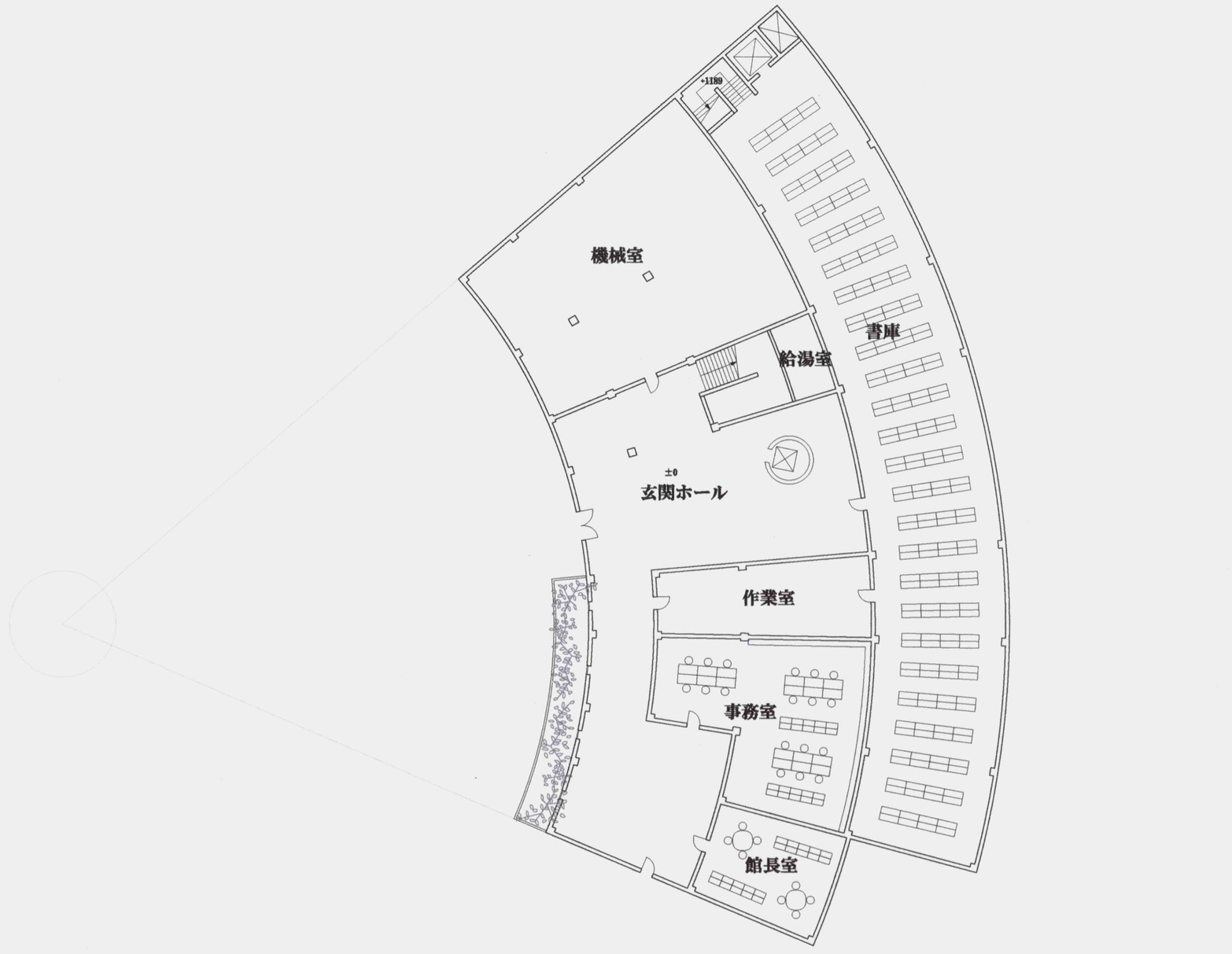
2.平面図



2F　平面図　1/250

(d)建築計画

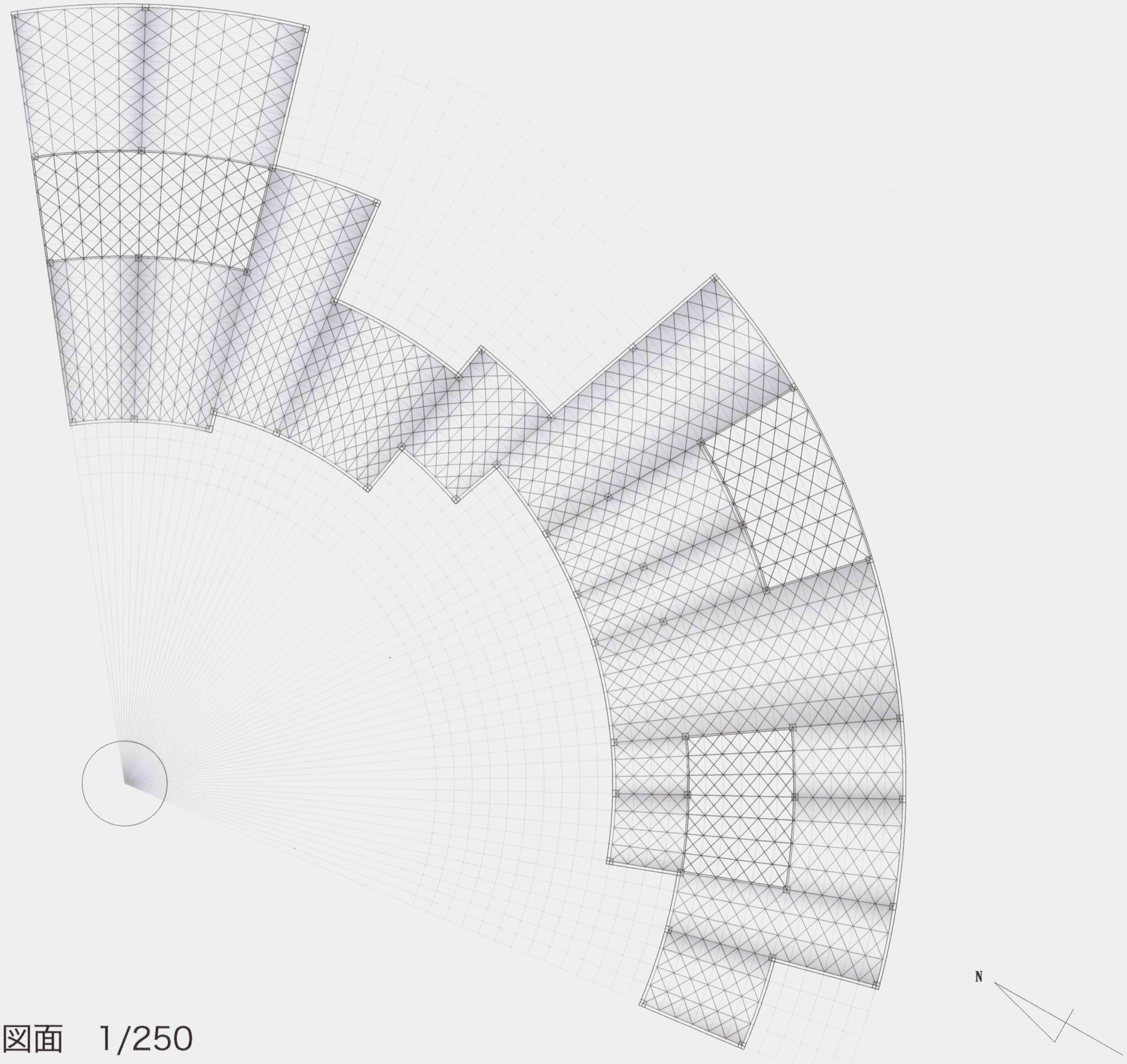
2.平面図



B1F　平面図　1/250

(d)建築計画

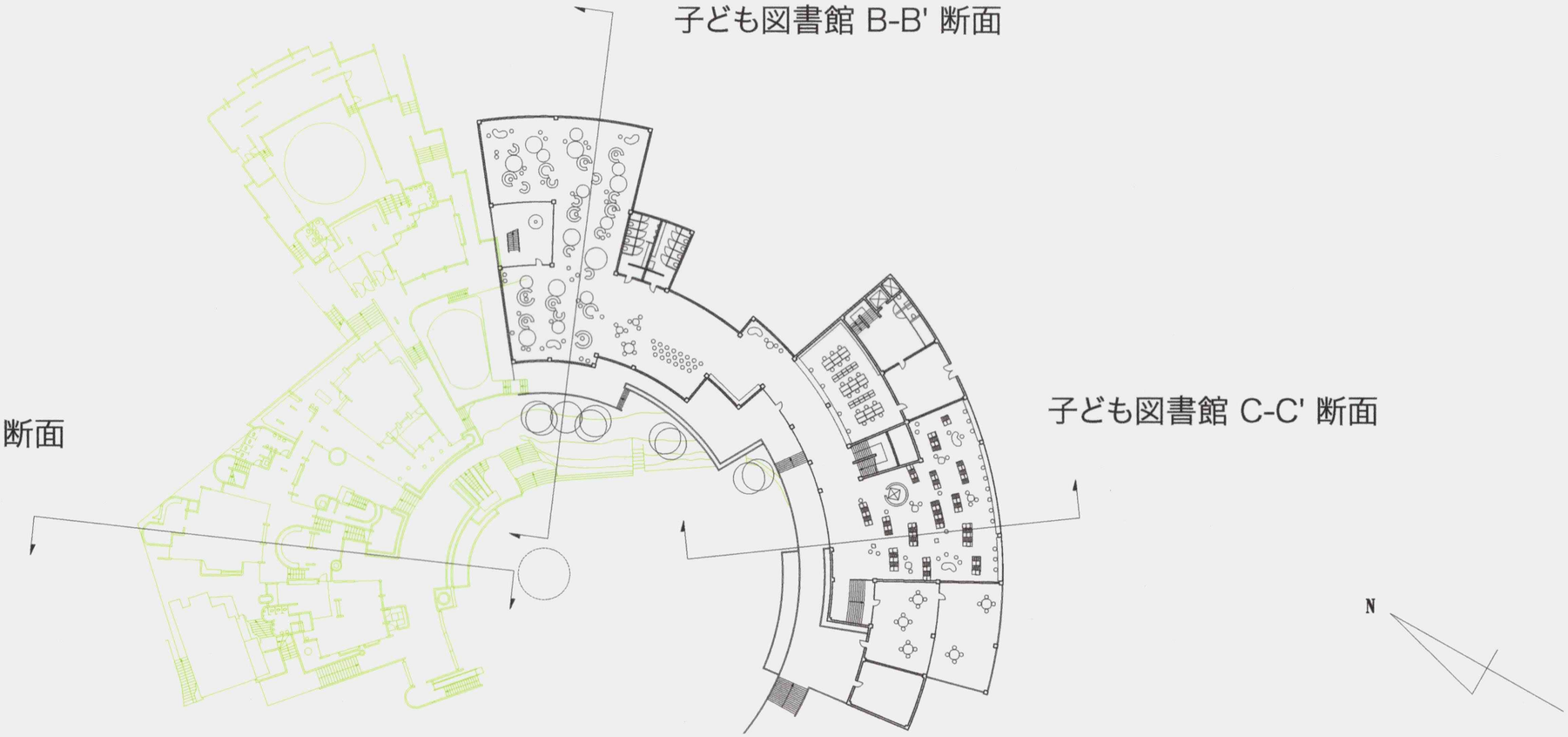
2.平面図

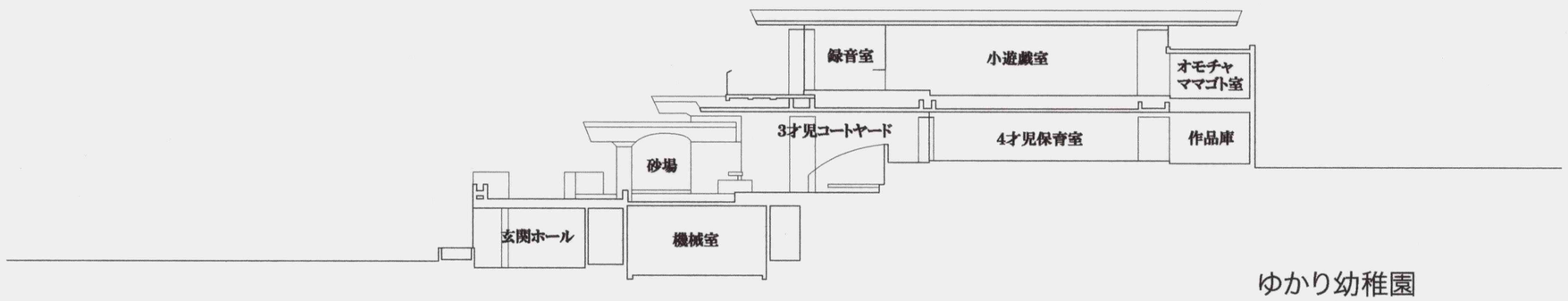


鉄骨ボールトアーチ　構造図面　1/250

(d)建築計画

3.断面図

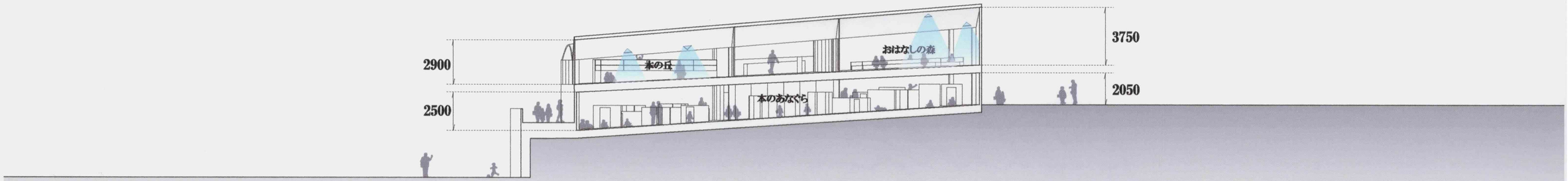




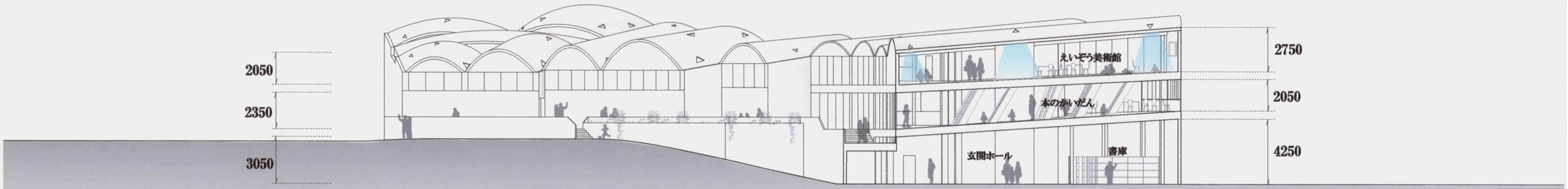
ゆかり幼稚園
A-A' 断面図 1/250

(d)建築計画

3.断面図



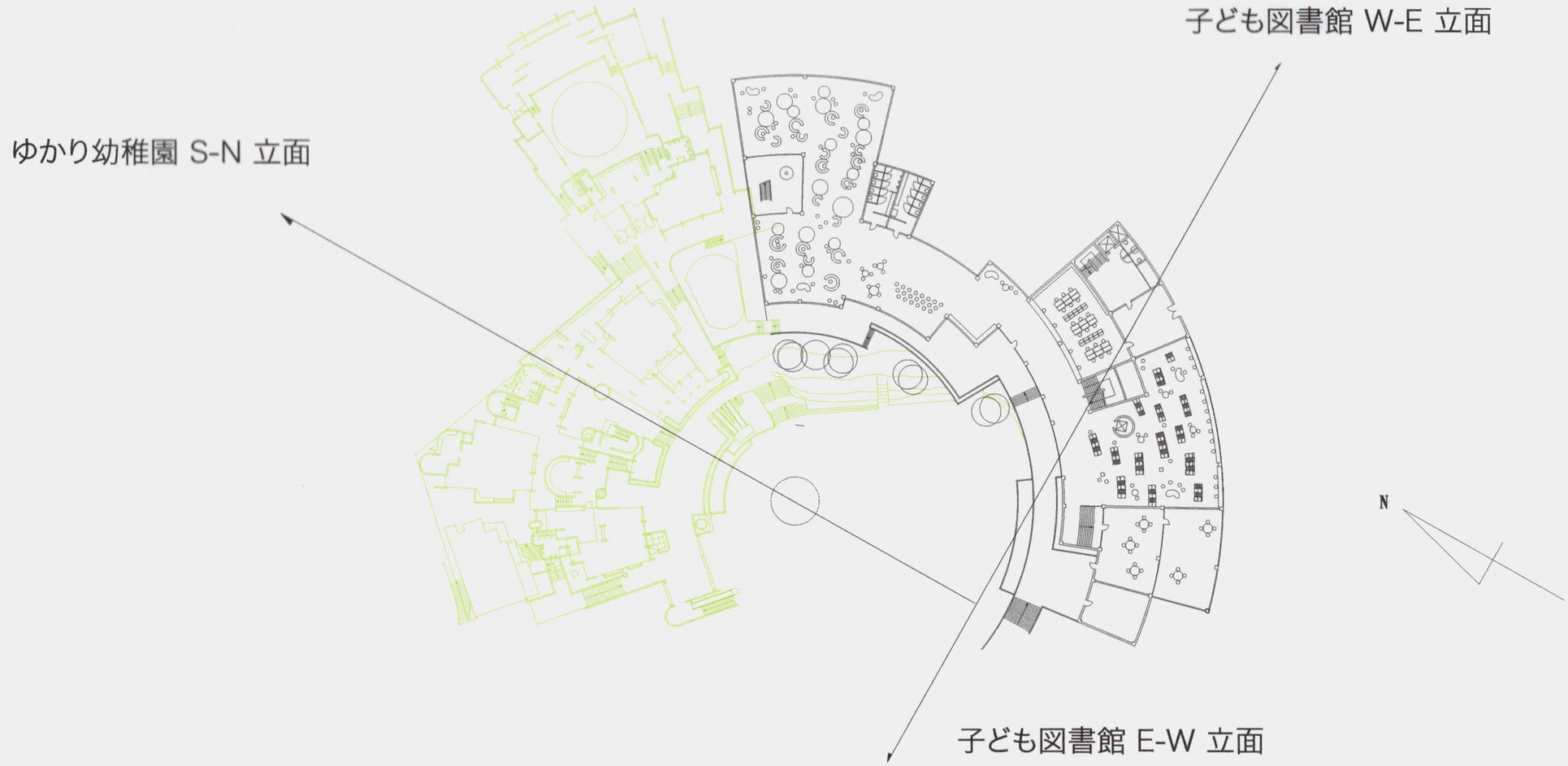
子ども図書館
B-B' 断面図 1/250

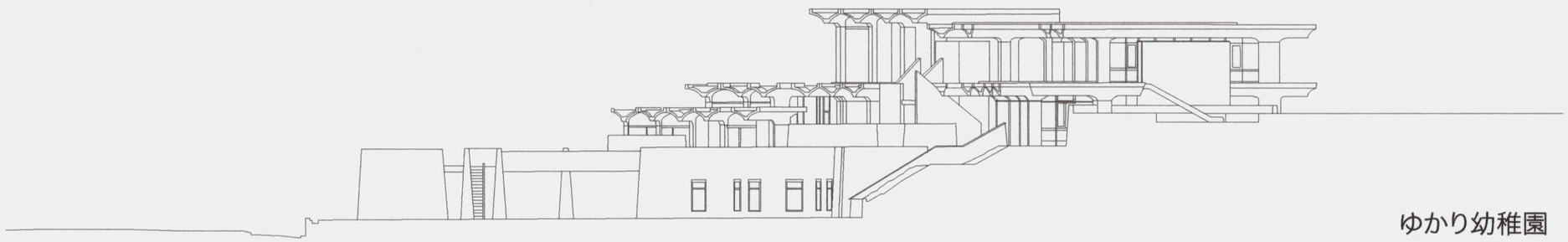


子ども図書館
C-C' 断面図 1/250

(d)建築計画

4.立面図

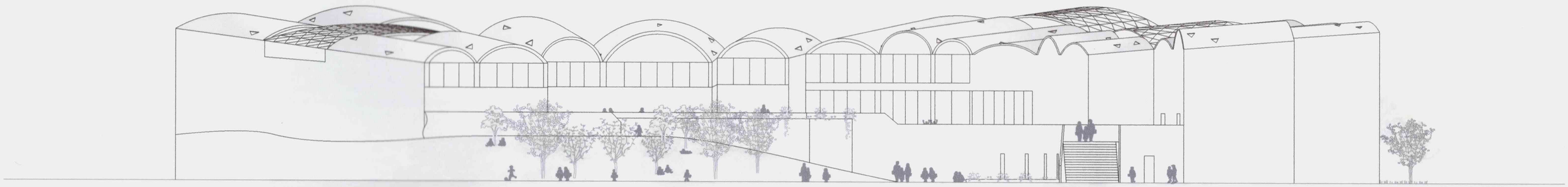




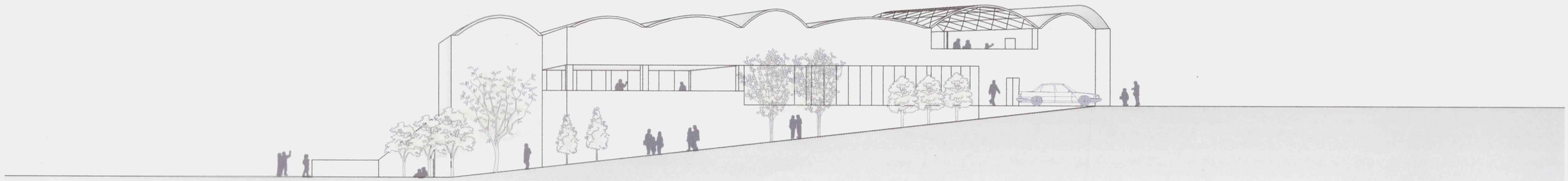
ゆかり幼稚園
S-N 立面図　1/200

(d)建築計画

4.立面図

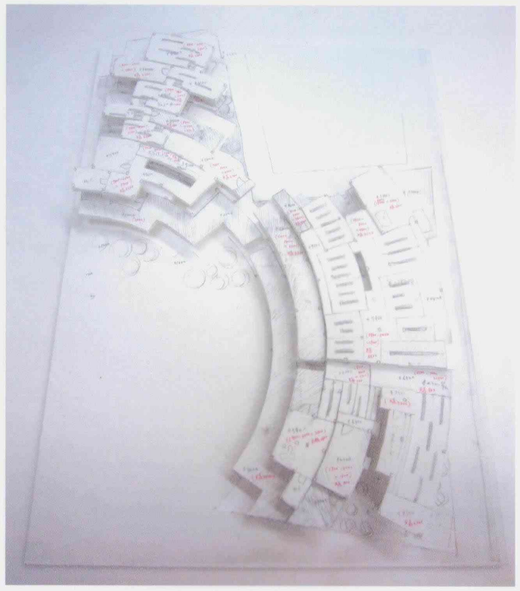


子ども図書館
W-E 立面図
1/250

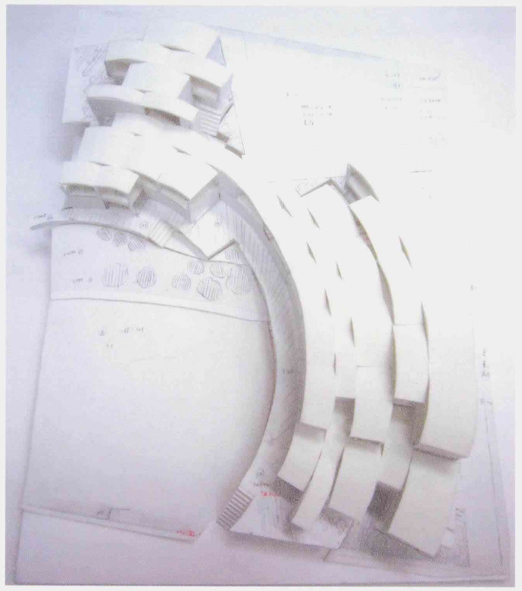


子ども図書館
E-W 立面図
1/250

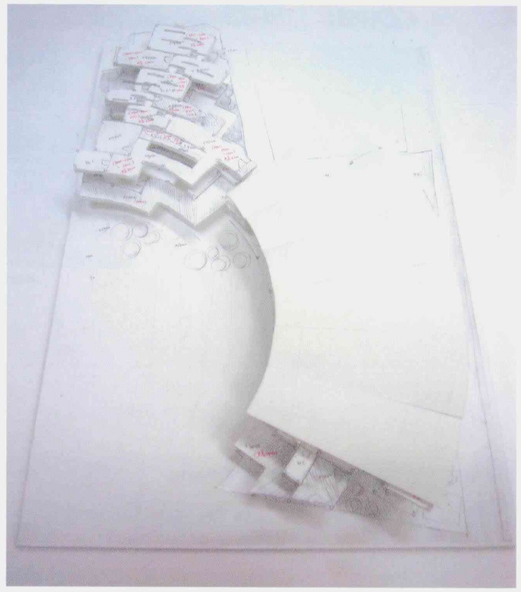
(e)スタディ模型と初期スケッチ



段差空間の検討。
高低差を利用しているオープンプラン。
しかし段差によって空間が複雑化し過ぎている。



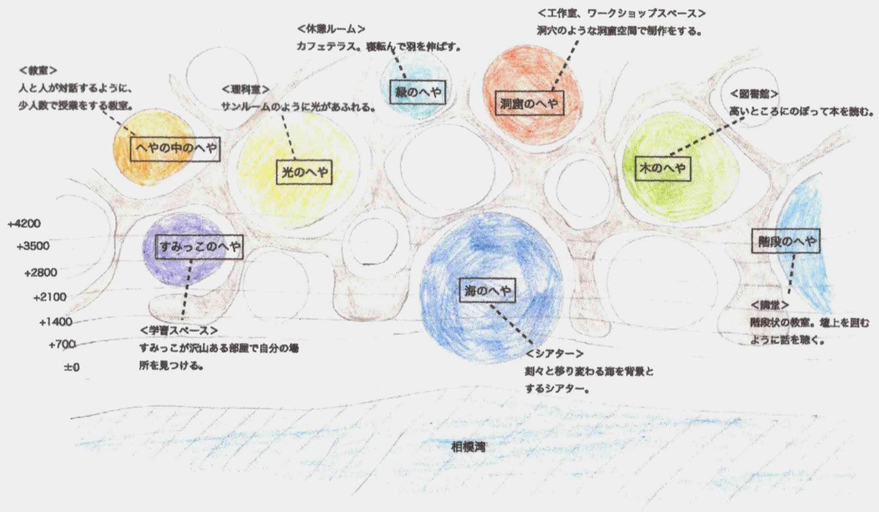
屋根の検討。
円弧状の流れをつくるボールト屋根。
しかし、屋根が軸方向に対して逆らっており、
ボールト屋根の特徴である、大スパンを飛ばす、
空間を伸びやかに扱う、という特色が生かせていない。



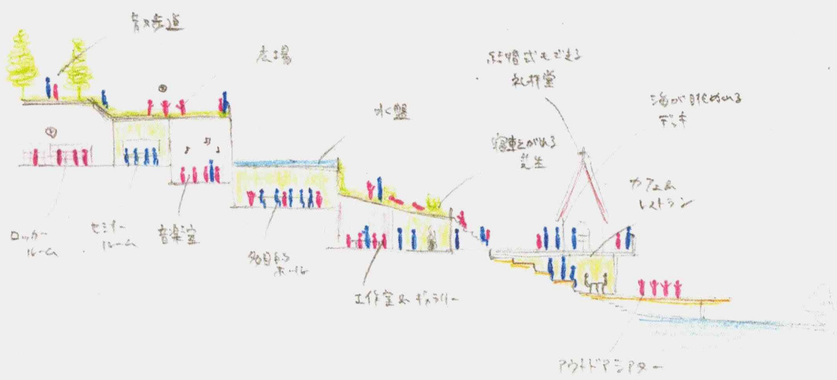
ボールド屋根再考。
求心的な軸にそったボールド屋根。

(e)スタディ模型と初期スケッチ

視覚だけで感じられる空間体験でなく、触覚や手触り、
運動感覚から空間を感じ、体験する場をつくる。



敷地の環境を生かし、ランドスケープと建築設計を同時に考えていく。



段差のあるコミュニケーションが生まれる場。

起伏と光が空間に抑揚を生む。

<8>あとがき

本研究、設計に際して、半年という長い期間、

様々なご指導を頂きました。

早川邦彦先生、並びに、主査の富永譲先生、副査を引き受けてくださった

渡辺真理先生、佐々木睦朗先生に深く感謝致します。

また、幼稚園の資料を提供して下さったゆかり文化幼稚園の関係者の方々、

そして多くのご指摘を下さった先輩、助けてくれた後輩の皆様に

心から深い感謝を申し上げます。